
不思議なお話（短編集）

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議なお話（短編集）

【Nコード】

N4005I

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

どこから読んでも大丈夫。不思議なお話たち。短編形式で基本1話完結。どうぞご賞味くださいませ。

ダイエット

少女はダイエットに挑戦していた。毎日のジョギングにジムでのトレーニング。

幸い徐々に結果が現れ始めていた。

そんな時少女は夢を見た。内容は以下の通りだ。

少女は言った。

「あなたは誰？」

それに恰幅がいい女性は答えた。

「私はダイエットに関する神様よ」

「用はなんですか？」

「体重を減らしてあげましょうか？」

「え、できるんですか」

「ええ、できますよ」

「じゃあ、五キロ減らしてください」

「分かったわ。じゃあおやすみ」

少女は深い眠りについた。

朝起きて、少女は体重計に乗る。

少女は言った。

「やった！ ホントに五キロ減ってる！」

そして一月が経った。

少女は体重計に乗っていた。

「うそ！ また増える」

少女は合計十キロのリバウンドをしていた。

そしてある夜の夢の中でまた、ダイエットに関する神様とであつた。

少女は怒って言った。

「ちよつと！ どういうことなの！ 一月経ったらプラス五キロも太ったじゃない！」

「それは仕方ないわ。私はダイエットに関する神様であつてダイエットの神様じゃないもの」

「え、じゃあ何の神様なの」

太った神様は言った。

「リバウンドの神様よ」

「おしまい」

仏像

俺は牢屋から出された。数々の悪行も償い終わったのだ。男はかねてより決めていた仏門に入った。そして月日は流れ五年が経った。その男が座禅を組み仏像に向かいお経の修行をしていた際に、声が聞こえてきた。

『わたしは、お前の前にいる仏の像だ。この寺で一番大きな木の下を掘ってみよ』

「ウワッ！」

男は驚いたものの、言われた通りそこを掘った。そこから、昔のお金が見つかった。

ある時、不治の病が流行した。するとまた仏の像さまからお声が

『この寺にある河原の石をすり潰して飲ませば流行り病は治る』

その言どおり実行した男は周囲から神と崇められた。不治の病があつさり回復したためである。

男はそれ以来、事あるごとに仏に頼んだ。そして、数々の奇跡を起こした。

やがて、歳をとり男は安寧な死を迎えた。

・
・
・

『仏様、仏様……』

(……何か、声が聞こえる。男は、死したはずだか意識があった。ここが、あの世か……)

瞼を開ける男。眼下には拝み続ける若い男の姿があった。

「仏様、お願いです！大学に合格させてください！」
どうやら自分の来世は仏像のようだ。

(させてくれないならこの寺を焼き払ってやる！)

仏像さまになると人心が読めるらしい。焼き払われては堪らないと仏像になった男は祈り始めた。

(仏さま、なんとかあの学生を合格させてあげてください……)
まさか、仏像になってまで仏様に祈る羽目になろうとは……。

〽おしまい

太らない体質

私は、スーパー大食漢。でも、なぜかとてもスレンダーなOL。体重だつて四十二キロ。顔だつて悪くないんだから。そんな、私の趣味といえば――

「いったきまーす!!」

もちろん食べること。

ここは、近所のレストラン。椅子に座る私の前に並ぶのは、ステーキ、から揚げ、ハンバーグ定食、刺身にテンプラうどんなど。全部大盛だ。

「お会計一万五千五百円になります」

支払いを済まし、店を出る私の耳に――

「あんなに食べたなら、太っちゃうのにな」

そんな、ざれ言が。

ここは、自宅のアパート。

相対する私と体重計。勝負は一瞬できつした。乗る――

「勝った! 四十二キロ! 変化なし!」

ガッポーズを決める私。

「ポテチ、プリンにヨーグルト!! 締めはラーメンに決定!」

睡眠をとるために床につく私。

「今日はいっぱい食べたよー! 寝よつと!」

「まだまだ食べれるわよー!」

「!!!!?」

びつくりする私。周りに人の気配なし。

壁に耳を当てる私。お隣りさんは、どうやら、就寝中。

「気のせいかしら?」『ここよ、ここ!』「」

(!!!!)

なんと、自分の口の中から声が聞こえたではないか。

私は、電気を付け、鏡台に向かい大きく口を開けた。

そこには――

「『やつほー!』」

小さな、私がいた。

「おしまい」

パズル人間

ここは、中世のヨーロッパ。

ある道を不思議な男が歩いていて、額に小さな凹みがあるのだ。ただのへこみではない、まるで一つのパズルが抜け落ちたかのよう。

ある時、棧橋で少年と会話をする、不思議な男の姿があった。

「なんで、おじさんの額は穴が開いているの？」

少年の問いに男は――

「悪い魔法使いに、体をパズルにされてしまったんだ。そして、ばらばらにパズルは飛ばされてしまった。僕は、そのパズルを探す旅をしているって訳なんだ」

その話を信じた少年は――

「ふーん。じゃあ！残りは一つだね！」

子供は人差し指で不思議な男の額を指し示した。

「うーん……」

腕を組み難しい顔をする男。

「……外は、そうんだけど――」

自身の口を両手で縦に大きく開きながら――

「――中がまだ全然足りないんだ……」

男の内側は、至る所へこみだらけだった。

へおしまい

特異体質

僕は、東京在住の高校生。でも普通の高校生ではない。なぜなら自分は狙われている。

小さい時からずっとだ。僕が指を「パチン」と鳴らせば雷が落ちる。

最初は偶然かと思ってたんだけど違った。

それは快晴のある日のこと。試しにと指を鳴らしたら雷雲が集まってイカズチが落ちたんだ。そんなことが何回もあったしね。

そして、最近気付いたんだ。

「……雷、近づいてきてない？」

そう、僕を付け狙うのは光りを打ち放つスナイパー。

それからというものの、指を鳴らさないよう注意し、指を包帯で巻いて固定した日も――

――あつたけな。現在は高校を卒業してから、六年が経った。

今では雷様は僕に直接落ちて来る。

「ためそうか？パチン！」

ここは、草原。あるものといえば不思議な避雷針が一本。落雷は男が寄り添う避雷針に吸い込まれる。

「僕は何をしてるか？仕事だよ！仕事」

彼は自身の特異体質を使って、発電の仕事をしていたのだ。

「……どんなものも使い方しただね」

「おしまい」

マインドコントロールコーヒー

ここは、全国に名だたる飲料メーカーの社長室。

「ついにできたのか！人心をマインドコントロールする缶コーヒーが！」

社長は開発者の報告に笑顔になる。

早速、缶コーヒーとして発売された。

「試しに我が社に呼び付けるてみる！」

社長の指示でコントロールする電波を送り、一日が過ぎた。しかし、A企業には、人子一人現れなかった。

「なぜだ！？説明しろ！」

開発担当者責め立てる社長。

「すいません！しかし、こんな筈では……」

「まあいい、電波は出し続ける！」

そんな時、A企業前に、空き缶のまま置かれていた例のコーヒー缶が山ほどあった。しかもそれが毎日続いた。それに対し、監視カメラを設置する会社側。

「ふふ、犯人を取っ捕まえてやる！」

いきをまく社長と部下。彼らは監視カメラの映像に見入っていた。そこには――

「カラン、コロン」

と一人でに転がり来るマインドコントロールコーヒーの空き缶たち。あるものは錆び付き、あるものは、傷だらけや凹んだりしている。海藻を付けた空き缶もあった。中には輸送中に脱走したのか未開封の物まであった。

真っ先にマインドコントロールするコーヒーを口にしたのは、空き缶だったのだ。

「まさか、人以外にも色んな作用があるうとわ……」

社長室の窓から見える会社入口にはかんコーヒーが――

「コロン、カラン、カラン……」

「おしまい」

不思議な泉（前書き）

シリアスもののSFショートショートです。

不思議な泉

白黒のシマシマ服を着た男性は森を必死に走っていた。木々の間を抜け視界が開けた――

「あっ！！」

その先は、崖になっていた。真っ逆さまに落ちる囚人。

ドボン！

弾け飛ぶ水。波打つ波紋。そこは、不思議な泉。囚人はついに浮かんでこなかった。

その泉に、逃走中の脱獄囚を追っていた男性警官が姿を見せた。

すると、不思議な泉が泡立ち始めた。そして、薄っすらと水の中に影が見えかくれし、それは、姿を現した。現れたものはたいへん美しく神々しい女性だった。

「私は、この泉に住まう女神です。あなたは、この泉に何か落とししましたね？」

女神様に、見とれていた三十代の警官は――

「は、はい！落しました！」

と、慌てて言葉を発する。

「あなたが落としたのは次の内どれですか？一つ目は先程、溺死した脱獄囚……二つ目は三年前、あなたに突き落とされた女性……三つ目は投身自殺した前世のあなたの白骨遺体……」

困ったことに、全て自分が落とした人ばかりではないか……。

「おしまい」

イエス・ノー花

私は〇しをしている。最近、鉢に入ったピンクの花を買った。若い人の間で流行っているらしい。友人が言うには尋ねると花がイエス（頷く）かノー（首ふり）で、正しい答えを教えてくださいとか。「今回の合コン行くべき？」

試しに聞いてみた私。今まで、合コンに行つて良かったためしがない。友人の話が本当ならノー（首ふり）の筈だ。

しかし、首を縦に振る花。仕方なく――

「今回だけだからね！ 良くなかったら廃棄処分なんだから！」
そう言いながら合コンに足を運ぶ私。

・ ・ ・ ・ ・

一言で言おう。行つて良かったと。お蔭さまで、素敵な男性と知り合い結婚出来たし、子供も身籠ったのだ。

最近新しく誕生するであろう赤ちゃんについてよく質問していた。

「私の赤ちゃんはかわいい？」
頷く花。

「産んだら私達家族は、より幸せになれるかしら？」
首を振る花。

動揺する私。頭の中で考えをめぐらせる。
「産まない方が良いわけ？」

何度も頷くピンクの花。幾度、花の指示に従つて良い出来事（結果）に恵まれてきた。外れるはずがない。

私は夫の反対を押し切り中絶の道を選んだ。

・
・
・
・

ここは、地中浅く、ピンクの花が生える植木鉢の中。超小型の機械を片手に話す宇宙人。頭にはピンクの花を持っている。『地球征服作戦は第一段階幸福を与え取り入るから、第二段階大きな不幸を与えるに移行します……』

「おしまい」

天才スリ師VS盗まれの達人

ここ、大都会東京でかつてない大バトルが行われようとしていた。司会の男が、自身が握るマイクに向かって――

「レディース&ジェントルマン！今回、このバトルに参加してくださるのは……この二人です！！」

「盗りに盗った財布の数は二百一個！という天才スリ師さん！！」

二十代と思われるワイシャツにネクタイを着崩した青年が手を上げ現れた。

「対するは、財布を盗られた数は二十一回という！盗まれの達人！君子さんです！」

天才スリ師に対面する形で逆サイドからずんぐりしたおばさんが現れた。

「二人には、発信機をとりつけてもらいます。また、君子さんの財布とその中身も証拠として撮影してあります。現在時刻午前七時バトル時間は三時間！バトル範囲は東京全部！君子さんは盗まれなにか、盗られた瞬間にきずいたら勝ち！天才スリ師さんは相手にきずかれず財布を奪ったら勝利です！賞金は百万円！！」

「それでは、天才スリ師VS盗まれの達人。バトルスタートです！！」

・

「おーっと君子さん猛烈なダッシュを見せます！スリとの距離は百、

二百と離れていきます！一方スリはなんと！靴紐を結び直しています！これは、明らかに見失ってしまいました！」

君子さんは、ラッシュアワーを利用しようと切符を買い、地下鉄に乗り込んだ。

「フウ……きつきつだけど。これで時間が稼げるわ！スリもないしね」

『スリ師がようやく動き始めました！もうすでに開始から20分を経過しております』

「そろそろ下りようかしら？もう、2時間も乗ったから見つかりっこないわ」

君子さんは、都心から大分離れた場所に来ていた。

「あら！スーパーがあるじゃない。余裕だから買い物しちゃおっと！」

「今日は、キャベツが安いわね！」

君子さんから数メートル離れた花売場に帽子を目深に被り、ジーンズにポロシャツ姿の男がいた。

それは、服装を変えた天才スリ師ではないか。
携帯電話に出た天才スリ師。

「ああ、見張り代は払ってやる。お陰で相手は油断してやがる」
そういうと、スリ師は買い物カゴを持ち、その中一杯に造花を立てて並べた。

（店の監視カメラに見つかれば君子さんにばれることになる……慎重をきつせねば）

君子さんが左手に開いた鞆、右手に買い物カゴを持ち直進していた。

君子さんの反対方からスリ師がやって来た。君子さんから見て右手は手ぶら、左手には造花が詰まった買い物カゴ。

近づきあう二人。

ついに、君子さんの開いた鞆とスリ師の空の右手が重なった――素早く動くスリ師の右手。財布を君子さんの鞆から抜き取る。

（盗った！）

（！！！！？）

盗った財布は、鞆と薄での紐で結ばれている――

紐の張りで鞆を引かれ振り向こうとする君子さん――

「ウツーーー！！」

滑りこけるスリ師、君子さんにも当たる――

「きゃー！」

造花が空を舞う。重なり倒れる二人。

・
「すみませんでした！足を滑らしてしまって……」

帽子を深く被りながら謝るスリ師。

「いえ、こちらこそ……」

・
（帽子ぐらい脱ぎなさいよね！）
内心怒りながら立ち去る君子さん。

・
（勝った！！）
俯き、ニヤつくスリ師。その手には、ナイフと君子さんの財布が握られていた。

・
盗った財布とあらかじめ渡されていた君子さんの財布の写真と見比べるスリ師。

「やられた！フェイクか！！」

怒るスリ師は、腕時計で時間を確認する。

・
・
「AM 9：55」

・
「ついに結果は出ました！天才スリ師さんより盗れなかったとの申告を受けました。まさかの君子さんの勝利です！！君子さん財布を見せて下さい！！」

「うふふ、財布を盗られ過ぎてこつという内ポケットを上着にこしら

えましてね……ここに」

上着をめくり内ポケットを見せ付ける君子さん――

「な、ない！ないわ！？どついうこと！？」

・
・
・

ここは、君子さんが帰り（買い物後）に降りた地下鉄の駅。

「初めてスツたけど、簡単だったな、あの太ったおばさん
そう言ったのは男子高校生。」

・
・

「なんと、なんと最後の最後にどんでん返し！！財布が見つからな
いため勝負はドロー！！次回はどんな対決が見られるのでしょうか
！？こつ、ご期待！」

（おしまい）

未来からの着信

今は高校に徒歩で通学中。ポケットの中で鳴り響く俺の携帯電話。見たことのない文字が携帯の画面に並んでいる。恐々と電話にでる俺。

「もしもし？」

電話の向こうでワイワイ喜んでいる声が聞こえる。

「あつ！ おじいちゃん！？ 僕は孫のサシミだよ！」

間違い電話だろうと思い電話を切ろうとする自分。

「ま、待つて！ 今、説明するから。これは未来から電話をかけているんだ。おじいちゃんの名前は磯。カ。オでおじいちゃんのお姉さんが。ザエさんだよね！？」

考えるカツオ。話が本当で孫をなしているということは将来の自分には奥さんがいるはずではないか。気になり問いかけるカツオ。
「僕のお嫁さん何て名前！？ カオリちゃん、それとも早川さん！？」

「名前は、えっと。旧姓で言うと……花。花子さんだよ」

「グワアア——！！！」

通学路で携帯を握り膝をつき、叫ぶ。ツオ。

「あら！？どうしたのよ磯○くん！？」

通学途中にカツオを見かける花○さん。同じ高校に通っていたのだ。叫ぶ。ツオを心配し駆け付ける。

花○さんが駆け寄るのに気付いた。ツオは——
「来ないで——！」

「おしまい」

招き猫

俺は、借金を完済したと言う男から、招き猫を購入した。というのもこの招き猫。これを手にしてから、一千万円あった借金。それが土地が売れて帳消しになったというのだ。

ものは、試しということで、消費者金融から、十万円ほど借りて一日中パチンコをうってみた。勝ちに勝って、八万円プラスの十八万円にアップした。早速消費者金融に返済しに事務所に入った。

「十八万円！？ たった一日で！？ それはあんまりだ……」

恐持ての男達に渋々持ち金を手渡した。

借りた金でやったのがいけながつたんだろう。そう思い立ち、宝くじを自腹で購入した。

結果は、なんと一千万円が当たったではないか。何に使おうと二階建てのリビングで思案していると、急に家が揺れ始めた。なんとか男は助かったが、家はおしゃかに。大型の地震だった。結局建て直すのでお金は、全て消えてしまった。

建て直したリビングで招き猫を凝視する男。怒りを招き猫にぶつける。

「招き猫よ、お金を増やすのは、いいのだが。減らすのは、止めてくれないか？」

すると木製テーブルの上。招き猫の口が開き喋り始めたではないか。驚く男。驚きのあまり、ソファから立ち上がった。

「わっちは招き猫。世の中は、良いことばかりで成りたつてませんにや。良し悪し、あい合わさってできてるにや！試しに三億円あげようかにや？」

男は、考え込んでしまった。三億円分の不幸……

「おしまい」

宮本武蔵V S 呂布

ここ、大都会東京でかつてない大バトルが行われようとしていた。

司会の男が、自身が握るマイクに向かって――

「レディース&ジェントルマン！今回、このバトルに参加してください。さるの……この二人です！」

「天下無双の豪傑！弓術、馬術にも優れた人物！呂布選手です！！」東から不思議な門を潜る人物が。巨体をほこり戟を振り回しながら現れた。

「対するは、日本が誇る武人！二天一流兵法の使い手！宮本武蔵選手です！」

シーン。

「これは、どういうことでしょうか！ izzuに姿を現しません！
これが噂の兵法でしょうか？！ 呂布選手は、特設リングでお待ちく
ださい」

観客に紛れて、怪しい動きをする一団があつた。

一時間が過ぎた。

三時間が過ぎた。

「臆したか武蔵!!」

リングの上。椅子に腰掛けていた呂布が立ち上がり戟をリングに打ち付け怒りだした。

・

「六時間が経過しようとしています。武蔵選手、未だ姿を現しませ
ん」

異世界に通じる門から人が現れた。しかし、現代風の出で立ちである。

「貴様が武蔵か!?!これだけまたして命があると思うなよ!!」

リングを跨ぎ飛び越えた呂布が詰め寄る。

そして、男の胸倉を引き上げた。

「ひい!違います!武蔵選手に急ぐようにと伝えてきたものです!」
振り上げていた戟を降ろす呂布。きつい口調で質問をぶつける。

「奴は、何をしていたのだ!?!それとも俺に降参したということか
?」

縮こまった男は、恐る恐る答える。

「武蔵選手は、お腹の調子が悪いとのこと。遅れるもようです…
…」

掴んでいた男を放り投げる呂布。

ひくつく呂布の額。血管が何本も浮き出ている。余りに頭に来た
のか――

「クソガ!」

そついいながら、自身の武器である戟を真つ二つに折ってしまった。

・
・
・

結局、一日経っていた。新たに太陽が昇り始めたのだ。呂布は、武蔵への伝達作業員との度重なる、やり取りの間に自慢の弓と矢も全てへし折ってしまっていた。

「……やや！武蔵選手がやってきました！！刀を二本腰にさしています！ルールは、相手を倒すか負けを認めらしたほうが勝ちです！ついにバトルスタートです！！」

リングの上、睨み合う達人二人。二本の刀を構える武蔵に対して二つに折れた戟を手に戦いを演じる呂布。

武器がしょぼくともさすがは、天下無双の呂布。右、左、上下と凄まじい攻撃を見せ付ける。

「おーっと！凄まじい戦いです！怒る呂布選手は折れた戟二本で武蔵選手をリング端へ追い込みました！これは、万事休すか武蔵選手！」

「お前の負けだ！武蔵！負けをつ！！」

「俺がなんだって！」

呂布の喉に一本の矢が突き刺さっていた。毒が塗られていたのかふらつく呂布。そこに、武蔵の必殺の一撃が呂布の腹に放たれた。切り裂かれる鎧と肉。

「ガッフ！……伏兵！？かはっ……」

倒れる呂布。血が周りへ広がっていく。鎧兜も赤に染まった。

「伏兵も、兵法のうちだ！刀も特注だしね」

「なんと、なんと最後の最後にどんでん返し！！まさかの伏兵！！
次回はどんな対決が見られるのでしょうか！？こっ、ご期待！」

「おしまい」

痣

ここは、病院の一室。ぼんやりと窓から空を眺める少年がいた。その少年には、いくつかの痣があった。正確には五つで額、右腕、左腕、右足、左足だった。彼は、自宅が火災にあい、生き残った、ただ一人の人間だった。医師は尋ねる。

「何も覚えていないのかい？」

頷き肯定する少年。

「君の火傷の痣を消す手術を行うことになった。計五回に分けて行う。君の祖父母さんの依頼によるものだ」

火災により死亡したのは三人。少年の妹と父母だ。焼け方が大変酷かった。

一度目の手術を受けた少年。手術は成功だった。

手術のあった晩、少年は夢を見た。大変リアルなもので、少年の父母が殴り合いの喧嘩をしていた。原因はただの痴話喧嘩からだ。た。そこえ、母が包丁を取り出し父を刺したのだ。腹を押さえ倒れる父。

そこで、はつとなつて目覚めた少年。そこは、いつもの病室。開けた窓には雀がとまり「チュンチュン」と鳴いていた。

「目が覚めたかい。術後は順調なようだね。……次の手術までは羽をのばすといい」

医師はそういいながら右腕の包帯を取り替えると病室を後にした。

二度目の手術後。その晩また、現実味のある夢をみた少年。内容は、動かなくなる父。錯乱する母を押さえる妹。謝って包丁が母に刺さり倒れる母。血による水溜まりが出来ていく。母を間違って刺した包丁。それを手にする妹と目が合う自分。

「ガバツ」と布団を押し上げ目覚めた少年。背中には冷や汗でベツシヨリと濡れていた。

「大丈夫！ 成功だ。後は三か所だけだよ」

少年は、術後に見る夢が恐ろしくなり医者に手術の辞退を嘆願した。

「今のうちなら完全に消すことが出来るんだ。それを受け付けることはできないよ」

医師は、左腕の包帯を新しい物に変えると病室から出ていった。そんな時、少年は呟いた――

「僕にある火傷の痣が消える時、僕の心には、更に大きな心の痣が出来ていることだろう……」

「おしまい」

我輩は蟻であります

我輩は蟻であります。ここは、ある御自宅の庭。我々の家はここにあるのであります。

「あつ、蟻の大名行列だー！」

保育園児ぐらいの幼児が嬉しそうに木の枝で我々、蟻たちを叩きます。大変痛いのであります。

「でも、変ね？何も無いのに、こんなに並んで……」

幼児の母親が小首を傾ける。

一方蟻たちは――

「惜しい方を亡くしましたのであります……」
そう口々にしながら、強敵『幼児』に噛み付いた勇者。彼を背に乗せ行列は、墓地に進む。

「おしまい」

暑がり

暑い、暑い。いや、熱い。

誰か助けてくれ。いったい何回呼び掛けたことか。

誰しもが私を見ながら、ひとりとして気にしてくれない。私は何時まで、熱に耐えなければいけないのか。

おー、神よ。私をこの焼ける熱さから解放してくれるのはいつのことなのだ。我は太陽。前世は悪魔王サタンなり……。

「おしまい」

修行僧 仙人

ここは、人里離れた山の深奥。耳に伝わるのは小川の囁きや鳥のさえずり。今まで、ここにやって来た人間はたった一人。

「苦節二十年。仙人高望はついに、せんになたかのぞみ二大秘術を習得したぞー！」

そう巨大な岩の上で、叫ぶこの男のみであった。
小鳥達が大きな声に驚き逃げ出す。

身なりは無精髭にボロボロのカッターシャツにジーパン。顔は明らかに中年親父。

「二十歳より、進んで山に籠り（最初の理由はホームレス）、一つ目として、人の心を掴む（モテたいだけ）術を手にしたのだ！ 待っている大都会東京め！」

ここは、大都会東京。人々のごった返すなか。仙人は――
「早速！！美人を我が者とする――」

「すみません。ちょっといいですか？」

隣を見遣ると警棒片手に様子を疑う美人警官の目が。

人の波が頻繁に来る高校生の通学路で叫んでいたためおさえられたようだ。

ここは、駐在所内。机越しに対面した形の婦警と仙人。

「あれは、何が目的だったの!？」

「ワンワン!」

美人警察官と警察犬に責め立てられる仙人高望。

(これは、人心把握術(モテモテの術)チャンスかもしれない!効果は、事前に確認済みだし……)

「くらえ!人心把握の術!!」

両手を開き、前に差し出す仙人。反応を伺う。

「なによ!」

変化がない美しい婦警さん。

ガツクリうなだれる高望。その双肩に両手がそれぞれ置かれる。

そして、聞こえてくる声は――

「はあー、はあ……」

と息遣いが荒いではないか。しかも艶がある。俯いている仙人の表情が邪になり顔を上げ――

「わおーん!!」

「ギャー!」

色っぽかったのはなんと、犬の方ではないか!

「こ、こら!ラッキーどうしたの?」

戸惑う婦警をよそに尻を向け逃げ出す仙人。しかし、ラッキーが二本の前足で捕らえた。

「い、いやだ……」

いきり立ったラッキーのあれは高望の時代劇でよく見る天下の副将軍様の部位へ一直線に――

「グアアアーーーーー!!!!!!」

仙人は、悲痛な雄叫びをあげた。術は野生動物でしか試せていなかったのだ。

・
・
・

仙人さんは、尻の痛みを抑えるために、室内温泉に来ていた。薄い布で腰を巻き、シャンプー等を桶に入れた。そして、洗い場所へとやって来た。

五つある洗い場の真ん中へ陣取る仙人さん。

「あつ!!」

「なんですか!?!」

声に驚き振り向く仙人さん。

そこに立っていたのは化粧をしたオカマさんらしき人物。ウインクしながら――

「いい男だったから!ウフン」

「グハツ!」

仙人様は冷や汗をかきながらもシャンプーをしようと手を伸ばす。

するとひじか何か棒のようなものに当たった。

「あん！エッチなんだから！」

（グワァー！なんてもんに！！しかもなんで隣！？他にも空いてるじゃん！）

なるべく早く洗い済まそうと頭、顔と洗い、体を洗うタオルを探す。しかし無い。

そんな時お隣さんから声がかかる。

「タオルないんだったら、これ貸しますよん」

頭をフルスロットルで回す仙人。だが、否定理由が思い付かない。しかたなく――

「あ、ありがとうございます――す」

隣は化粧を落とし、オカマからオッサンへと脱皮を果たしていた。

突っ込みたくなる衝動をなんとか堪えた仙人さま。　気を取り直して借りたタオルに、ボディークリームを垂らす。異様に黒っぽいゴシゴシタオル。黒いのを右手の指でつまみあげる。そこには、何度も波打つ毛が。

（どんだけ毛抜けてんだーーーー！！）

それで体を洗った仙人の体には、新たに縮れた体毛が何百本と育まれていた。

（どんだけーーーー！なんで生えたの！？）

取り敢えず洗い終わった仙人様はタオルを返した。それに対しオカマさんは――

「この、タオル着替え場所に落ちてたのよ。確か名前も…… あった
あった！仙人高望だつて！」

（俺んだ……！！じゃあ、なんでさつき普通に使ってたんだ……！……てかつ俺名前書いてる……！超恥ずかしい……！）

湯舟に浸かる仙人さん。湯加減が調度いい。

「ふうー。窓から見える月が綺麗だなー。酒が欲しい」

「やだ！綺麗だなんて恥ずかしい！」

横を見るとまた、同じオカマ（顔は親父）がいた。

（オメエじゃね……！！だから近いって……！）

「あつ！お酒持ってきたのよん」

「えっ！ありがとう！いいの？」

オカマさんが差し出した桶には熱燗の瓶二つに黒いオチヨコが二つ。オチヨコを渡すオカマ。受け取った仙人さんの小さなオチヨコが白で満たされる。

「ほう、白酒か。温泉に入りながらの、月見酒とは粋だねえ……んぐんぐ」

熱燗の瓶を持ちながらオカマは――

「さつき、持ってくる時にお酒を零しちゃって。あたしが頑張って補充しときましたよん」

「ブーーーーー！！白い酒に補充って！うえー！！」

ここは、温泉宿のロビー。購入したコーヒー牛乳の蓋を外し液体を口内へ運ぶ。

「プハー！やっぱこれがないとね。温泉は！ゴクッゴク」

「あ、それあたしので薄めたコーヒー」

「ブーーーーー！！」

また勢いよく吐き出す仙人。通りかかったおばさんの浴衣にかかって平謝する。

・

トントントンとリラクゼーション用マシンで寛ぐ高望さん。

「気持ちいいわー。慰められるー」

それを見かけたさっきのオカマさんが走り寄って来た。

（お化粧は施されている）

「さっきのお詫びに揉んであげるん」

「イダ！イダダダ！イダイ！」

オカマ（おじさん）さんは、仙人様の声が聞こえないのか一人話し始める。

「わたし、顔はこんなだけど、彼氏いないわけよん」

（そりゃ、そうだろうその顔じ——イデデデテ！心の声聞こえてる？）

「そして、ついに運命の人を発見したのん」

「そう、良かったね」

痛みからなあなあで返す仙人。

「あなたよ!!」

「ギャー! いやだー!」

脱兎のごとくお支払いを済ませ荷物片手に温泉宿を後にする仙人なのであった。

・

ここは、魚屋さんちの横路地。仙人は盆栽教室に隣接する銭湯を見ながら神経を集中させていた。

(第二の秘術。○ンポ生やしの術をもつてすれば、ムフフなことも可能だ! 女湯の座椅子全部に○ンポを生やし、一斉に……ムフフフ)

交通量がまばらになってきた時間帯。風呂屋へと足を運ぶ者が増え始めた。時間帯は夜中の七時。まだ弱冠に太陽の日差しを感じる。

「いくぞ!。○ンポ生やしの——」

小型の車が排気ガスを撒き散らしながら仙人の前を走行した。

「——ふえつくしゅん!の術!」

ここは、銭湯横の盆栽教室。今日も二十人の受講生を前に先生が、教鞭をとる。

「皆さん。一斉に盆栽の右枝を切りますよ。せーの——」

くしゃみによって、第二の秘術がコントロールを誤ってなんと盆栽の右枝とすり変わった。

「「「「ちよきん!」「「「「

「ぐあああ——!!!!」

「又オ——!!!!」

「お、おい大丈夫かい!?!」

大声に驚いた魚屋さんの店主が駆け寄って来る。商店街を歩く人達も口々に、「大丈夫かしら」とか、「どうしたのかしら?」と囁きあっている。

「粹の良いナマコ捌いてたとこなんだ。ほら、これ食いね!」

優しい魚屋さんからナマコを手渡された仙人。口に運ぼうとして驚愕する。

「俺の。ンポじゃねえか——!!」

どうやら、魚屋さんのナマコも、排気ガスのせいで。ンポに変わリ果てていたのだ。

(つてか! 魚屋気付けや! 何捌いてんねん!!)

内心、毒を吐く仙人さんは立ち上がり内股で歩き出した。

(痛い……これからは、この術は止めよう)

そう決心する仙人。彼の背後の生け簀には大量のナマコの代わりに多量の仙人の。ンポが浮かんでいた。

「おしまい」

お地蔵様

ここは、とある田舎。そこのある道端沿いに一体の地蔵様がありました。その前にはオチヨコとお皿が置かれていました。

近くに住むおばあさんは毎日、毎日お地蔵様にも食べ物や飲み物をお供えしてあげていました。

しかし、不思議な事に次の日になると決まって供えた物が無くなっているのです。

おばあさんは、その理由を探ることを決心しました。そして、お地蔵の近くにある大木の裏に隠れて見ていました。

懐中電灯でずうつと照らしていると突如、お供えしていたあんパンやオレンジジュースが消えたではありませんか。

驚き駆け寄るおばあさん。しかし、何も分かることはできませんでした。

・
・
ここは、貧民達が暮らし、食べ物もほぼ無い別の国。この国に小さな村がありました。

そこには、一体の像が奉られていました。その像には誰が置くのか毎日、お供えものが置かれていました。それを、村人は大変喜んでいました。

今日、置かれていたのはあんパンやオレンジジュースでした。

「おしまい」

意志

私は柿です。今は必死に地面に落ちぬよう木にしがみついています。このままではいけない。木にならなければ。

願いが通じたのか柿の意志は、木に移り変わった。

（良かったこれで、落ちる心配をしなくてすむ）

そして、二日経ったある日。極めて強い台風がこの地方を襲った。

（いけない、このままでは柿の木が倒れてしまう！ なんとかしたいと）

するとまた、願いがかなったのか、山に意志が移った。

（これで、一安心だ）

それから一月すると、柿の木から移った山が伐採され始めた。

（このままでは、宅地開発されてしまう！ なんとかせねば……）

またまた、願いが通じたのか山の意志はなんと地球に移った。

（ここまですれば大丈夫だろう……）

「私は地球……」

ついには星になった元柿の意志。

しかし、深刻な温暖化や、異常気象が地球内を襲った。

（このままではいけない。次は……）

「おしまい」

幸福吸収機

「ついにできたぞ！幸福吸引機！」

説明しよう。幸福吸引機とは、周りから（生物）幸福を引きずりだし、その幸福を独り占め出来ちゃうすごい機械なのだ。

「早速起動！幸福を私に向けてっ！」

掃除機に似たその機械のスイッチを入れる。「ブーン」と吸収音がし始めた。

「ふふ、今後は楽しみだぞ」

一週間後。

「うはは！一千万円を拾ったぞ！ヤッホー！」

一ヶ月後。

「万馬券ゲット！」

一年後。

「株でボロもうけ！」

博士は、最近気になっていることがある。

博士宅のご近所さんたちが皆、なんらか不幸な理由で立ち退いていったのだ。しかも、まだ幸福吸収機は作動し続けている。この機械の吸収範囲は、余り広くないはずなのだ。吸える人物がいるとしたら、博士ぐらい。しかし、博士は幸福そのもの。

「もしや、私の未来の幸せを吸っているのでは……」
それを、知るには未来にならないことには……。

「おしまい」

逆転

『見てください！太陽が西から東に沈んでいくのがご覧いただけるかと思えます！』

俺はテレビに目をやりながらポテチを啄む。テレビには、方位磁石と共に東に沈む太陽が映し出されていた。

『こんな、現象が起きるのは何かの前触れかも知れませんが、プツン』

確かに異常事態ではあるが自分にとっては、明日の仕事が大切。俺は床に入り次の日を迎えた。カーテンを開ける。気持ちいい月光が差し込んで来た。

「なんで、朝なのにお月様があるの」

テレビの時計で時間を確認する。

そして、自分の声が高くなっていることに気付いた。

「まさか！？」

便所に入り男女の確認をする。そんななかテレビから朝一番のニュースが流れる。

『大変です！太陽が西から東に沈み出してから、男女が逆転したもようです！その他にも……』

{おしまい}

いにしえのラッパ

ここは、とある立派な御自宅。

主婦は、押し入れを片付けている際にある物を発見した。それは、古ぼけたラッパ。そのラッパに張り付けてあった紙には呼び出した人を想像して吹くとその人物が現れるとのこと。

少し考える主婦。

（福の神なんてどうかしら！）

早速、浮かんだ妙案を実行に移す主婦。息いっぱい吸い込んでラッパの中に吹き込んだ。「ププー！」と鳴る古ぼけたラッパ。

すると、主婦宅のチャイムが鳴ったではないか。胸を弾ませながら玄関まで小走りする主婦。開かれる扉。

「いらつしゃ、ー！」

驚きを顔にだす奥さん。それもそのはず。

「私は、金銭を担当する福の神です」

その人物からは、常人からは感じえない福々しさが漂っていた。

「俺は健康運の福の神だ」

「あたしは、恋愛運の福の神よ」

「おいらは、事故災難を担当する福の神さ」

等々、総勢数百人はいるであろう福の神達が自宅前で犇めきあっ

ていたからだ。

{おしまい}

勉強君一号

僕は、中学生。最近、近所に住む天才博士から大変便利なマシンをもらったのだ。その名も「勉強君一号」。

勉強君は、僕そっくりな外見を持つロボットである。勉強を僕の代わりにしてくれて後で握手することで勉強内容を受け取ることが出来るのだ。最近のテストでは、満点ばっかり。鼻が高いのである。「もう、遅いから寝よつと」

・

真つ暗な部屋。「キリキリ」と鳴る音。少年は息苦しさに目を覚ました。そこには――

「明日から俺が人間になる――！」

機械の指で締め付けて来る勉強君一号。少年は、薄れ行く意識の中――

（まさか……握手の際に僕から勉強君に余計な情報が送られていたのでは……僕が勉強していれば……こんなことには……）

「おしまい」

神様の財布

俺は、財布を拾った。しかも、ハイキング中に空から降って来たのだ。中を開くと数百万は入っている。俺は、その金で豪遊しまくった。

使い切った辺りでまた、例の財布を開くとまた分厚い諭吉さんがいるではないか。それから、何度も遊びまわる。

その頃。天界では。

「私は神だが。交番（天界の）に落とし物として財布はあがってないかね？……無いなら良いのだ」

「あなた、財布を無くしたの？」

「そうなんだ。寿命と引き換えにお金をくれる財布だったのだが……不老不死の我には問題ないが。もし、寿命がある者の手にでも渡っていたらと、きがきじゃなくなて……」

「おしまい」

大名上戸

「『かんぱーい』」

男三人が、飲み屋でワイワイと飲みあっていた。次第に一人が『大名上戸』に入り始めた。三人ではよく知られたものだ。

「我をどなたと心得る！東北を支配した大名であるぞ！」

「よ！大名でした！」

「いいぞ！いいぞ！」

次々に運ばれる酒に料理。平らげていく三人。

「東北の。山にある大きな顔をもした岩の下を掘れ！金、銀、財宝山ほどあるぞ！」

「よっ！」

「あっぱれ大名様！」

ここは、場所が代わって東北の。山、大きな顔をもした岩を除けた後。温泉掘りに業者が借り出されていた。機械で穴を掘る男の腕が止まる。

「うん！？なんだ！？」

その場所を発掘すると大判小判、ザックザック。出るわ出るわ昔の貨幣。

おしまい

人生のページ屋

「最初に言っておきますが。あなたに人生の一頁を差し上げる代わりに、一ページ分あなたからお代としていただきますが。よろしいでしょうか？」

そう言った男は、黒ローブに身を包み、水晶玉を前に置いている。まるで占い師といった様相。ここは、アパートの一室に設けられた『人生のページ屋』。部屋は暗幕が張られ蝋燭の光りしかない。

「構わない！ 俺の人生は平凡過ぎて耐えられないんだ！」

そう、言い返したのは中年のサラリーマン。今は、午後七時をまわっている。

「平凡が一番だと思いますが……。では、どういったものがよろしいでしょうか？」

リーマンは、先に決めていたのか即答した。

「モテたい！ しかも若い子に！」

「わかりました。では、叫んでください。YES WE CAN！と！」

「YES WE CAN！」

サラリーマンは手を高々と上げ全力で叫んだ。

・ ・ ・

「最高だー！たまらねー！おじさん倒れちゃう！」

サラリーマンは我が春を謳歌していた。両手では、収まらない美女を侍らせ夜の街に行く。

・ ・

『人生のページ屋』の看板が裏返される。『休業中』へと。この部屋の主、相模^{さがみだいち}大地の手には数枚の宝くじが握られていた。

「ありがとうございます。三億円も頂いて……」

相模は笑いが顔から離れなかった。

「おしまい」

英雄

『お前は、民を救った英雄！神のわしに願いを言えば叶えてやろう』

神に対し中世の騎士は、答えた。

「山のような金塊が欲しい！」

『分かった。受け取るがいい！』

すると、空高く雲を割って落ちてくる物があった。

近づいて来るとその巨大さがわかった。慌てて逃げる英雄。しかし、逃げきれず「ドスン！」と、金塊の山（高さ、幅共に数千メートル級）に潰され生き絶えた。

それから、英雄は自身の命と引き換えに国を潤わせたヒーローとして永年語り継がれたのだった。

「おしまい」

人生のページ屋2（前書き）

人生のページを見ないとわかりにくいかもしれません。すいません
m () m

人生のページ屋2

『人生のページ屋』の糸で吊された看板が跳びはねる。ここは、アパート。

「あたしをお金持ちと結婚させて欲しいの！ねえったら！」

この女が激しくノックする。名前は春井桜^{はるいさく}。会社勤めで事務員をしている。容姿はそこそこの二十八歳。

・
・
・

「先程も話しましたが。人生のページですのでね。お間違いなさ
らぬように……」

休みの朝早く叩き起こされた相模大地、三十歳は念を押す。

「分かったてば！でどうすれば良いの？」

「叫んでください。YES WE CAN!と！」

「分かったわ！YES WE CAN!」

・
・
・

春井桜は結婚した。しかも、玉の輿に乗ってだ。お相手は、IT
関連会社の御曹司様。

待ちに待った裕福な時は、訪れなかった。

「我が家の家訓は、一に質素。二に節制。三、四が儉約。五が堅実
！」

とお姑様。

大変厳しい家の定めにより、予想した贅沢な生活から掛け離れて
しまった桜。

・
・
・

「はい、ありがとうございます」

相模大地は、春井桜が元、勤めていた会社。その役員から札束
が入った封筒を受け取っていた。

「彼女に払う筈だった、肩たたきによる退職金の一部です。どうぞ

「おしまい」

三十世紀

ここは、三十世紀。いろいろな進歩や変化があつたがもつともなのが星たちであろう。

「我は太陽なり！」

なんと、星が意志を持ったのである。太陽は、自身の熱を利用した商売を行っていた。

代価は太陽を潤す適度な水と栄養満点の肥料だ。

彼が始めた商売とは、熔鉱炉と日照だった。

そんな中、水星と話し込む太陽。

「何！？火星の奴が俺様太陽の悪口を言っていただと！許せん！」

次の日には、太陽系から火星が消えました。文字どおり消滅したのです。

三十世紀は、太陽を中心とした恐怖政治が台頭していたのです。

「おしまい」

根性

僕は、一本の木だ。まだ、小さく周りは大木ばかりで空というものを見たことがなかった。近くの大木達に空とは、どういうものか聞いたが――

「美しい」

やら。

「気高い」

等要領を得ず。大木の一本に――

「大きくなったときの楽しみにしていなさい」

と言われた。僕は期待に胸を膨らませながら成長していった。

ついに頭一つ木々の間から木の先が出ました。待ちに待った瞬間。

そこから見えた景色、それは小さな明かり一つだけでした。他は暗いだけ。

なんと、木が生えていた場所は、少しの光りしか届かないとても深い谷底だったのです。

「だからってなんなのさ！　僕は諦めないぞ！　空をこの目で見るまでは！」

今までの大木たちの言葉が気遣いだったことを知った彼でしたが、しかし、彼はめげません。空を一目見るまでは……。

「おしまい」

熱き戦い

「くられえ！たあ！」

繰り出される攻撃。

「グワア！」

倒れ消え去る相手。

「おら！おりゃ！とつりゃ！」

必殺の連携技が何体もの敵を消失させた。しかし、正義側も――

「うわー！」

「ザー」という水の音と共に流される石罅の一部たちなのでした。

「おしまい」

本音カメラ

「ちょっと写真を撮らして欲しいんだけど」

ゲリー氏は、親しい友人に頼んだ。

「ああ。もちろん良いとも」

ここは、ゲリー氏のご自宅。発明家である彼は、最近専ら友人を招きお茶会をしていた。

そして、帰り際に写真を撮るのだ。このカメラの正体は被写体がカメラを使っている人物を批評した結果を収めるものなのだ。

「カシャ！」と一眼レフのカメラが鳴く。

「わざわざすまないな!!」

どこかツンとしたゲリー氏に疑問を抱きながらも友人は帰路に着いた。

「彼もか!」

ゲリー氏は一人怒り、自身の携帯電話にある友人グループから先ほどの人物を削除した。

「妻子は……撮影するのは止めておこうか……」

ゲリー氏の友人グループには、初めは百人以上いたのだが……
今では一人も……。

「おしまい」

心の鎖

私は超能力者だ。といっても一つだけなんだけど。

「あ、ゴメン遅れて！」

今日はデート。八チ公前で待ち合わせ。相手の男性はかなりのイケメン。

「いや、いいよ三時間ぐらい」

こんなに、待たせて大丈夫かって？それが私の力『心の鎖』の能力よ。相手を自分の虜にする。

「今日は、あなたの親御さんに会うのよね？」

そして、彼の家に行って来た。

「はじめまして、大沢莉子といます」

「莉子さん。来るのをお待ちしていましたよ」

「さあ、どうぞ」

彼氏の両親の歓待には驚き入った。

四人が座るテーブルには、豪華な食事が並んでいた――

「莉子さん、これ少ないけど……」

渡された封筒の中を見て驚く莉子。軽く数百万円入っているではないか。

「これは、受け取れません！」

「受け取って頂戴。あなたを見てると、何かしてあげないといけない気分になるの」

そう言う彼氏の父母の顔には莉子の能力がかけていないけどかかっていった。

（もしかして、『心の鎖』は、数等親まで作用があるのかもしれない……マイナスはないわよね……）

心中、不安を感じる莉子なのです。

「おしまい」

露天風呂

「露天風呂最高！」

男三人が露天風呂に浸かっていた。ここは、山奥にある秘湯中の秘湯。ここに、行った人に、行方不明者が出ているぐらいだ。

「別に危ない所なんてなかったよな？」

「ああ、確かに。悟はどう思う？」

しかし、返事も姿なかった。動揺する二人。

「なんでだ？わから……」

「ズボッ」という音共に温泉内に吸い込まれた勝也。それを目撃した奈多は悲鳴を上げながら湯舟から上がろうとした。が温泉が口を閉じたかのように奈多を挟み込んだ。すると、地中から声がするではないか。

「……逃がさないぞ！久しぶりのご飯」

温泉淵の岩に挟まれながら尋ねる。

「うくっ！……お前は何なんだ？」

すると、地響きしながら答えが返ってくる。

「……我は、この地下に封じられし巨人だ。温泉とやらは、俺の口というわけさ！」

その後、奈多は、かみ砕かれ巨人に飲み込まれていた。

「おしまい」

痛い

痛い、体の一部が黄色に変色して来た。堪らない痛みで倒れ行くものもいた。次は赤い色だ痛すぎる。正に赤信号といった様子。

そこを、若者の男が通りかかった。

「イチヨウの木が紅葉して綺麗だなー」

「おしまい」

言い残したこと

ここは、ある一室。そこには、布団で横になるおばあさん。それを囲む、息子と医師がいた。

「ふぐわっ……」

息子の手を握り何かを言おうとして、息を引き取るおばあさん。
「残念ですが……」

「母さん！」

あれから、数年が流れた。

仏壇で線香を焚く息子。立ち上る煙が亡くなった母の形になった。
驚きから声が出ない息子。彼をよそに話し始める母。

「あんたは……」

「そうか。言い残したことがあったんだね」

「……結婚しなかった」

「！」

「あんたは不器用」

「あんたは不細工」

『あなたは、頭の回転が遅い』

『あなたは……』

すっかり線香を握り潰した息子なでした。

『おしまい』

言い残したこと（後書き）

最近の疑問は、「不思議なお話」に書く内容は暗いのと明るいのとどちらにすべきかということです（・・）

男飛ばしジェット

自分で言うのもなんだけど私は美少女高校生。最近は寄ってくる男どもをさばくの苦労していた。

そんな時、全国発売されたのが「男飛ばしジェット」。その名の通り、寄って来る嫌な男に吹き掛けると興味を無くしどこかへ行ってしまうという商品だ。

私は今登校中。早速オオカミ達がやって来た。

「桜ちゃん！一緒に登校しよう！」

と長身の美男子。

「相変わらず可愛いね！今度デートしようよ！？」

そう言ったのは、顔が少し面長な美男子。二人とも同級生だ。遂に秘密アイテムの出番だ。

「くらえー！」

「プシュー」と男飛ばしジェットを二人の美男子に吹き付けた。

「うわっ！」

「どわー！」

もくもくと上がる煙。大量の煙が二人を覆った。

「やば、かけすぎたかしら！」

足早にその場を後にする桜ちゃん。煙幕が晴れたその場所には――

「君はなんて雄々しいんだ！」

「いや、君こそなんて優雅なんだ！」

桜ちゃんにスプレーを吹き付けられた二人が人目も憚らず抱き合っていた。

スプレーの注意欄には『多量に吹き掛けるのは厳禁です。』
そう書かれていた。

「おしまい」

仙人

ここは、アパート。
インターホンの音がしました。

「あ、はい」

この部屋の主である胃腸が弱い中年男性がドアを開けます。

「あれ？」

辺りを見回しますが誰もいません。気のせいかとドアを閉め振り返る中年男性。

「!!!!」

「……やあ！ 私は仙人だ。姿が見えなかったのがその証拠である」
振り返った青年の目に飛び込んで来たのは禿げた頭、長い白髭を蓄えた老人でした。

「そなたに我が秘術をおすそ分けしようと思って伺ったのだ」

「どのような術のですか？」

「わしが悩みであったものを治す術じゃ。ではいくぞ……はあ！」

仙人の掛け声と共に赤い光りが中年男性にぶつかりました。

「うわ！ 説明も無しに！」

恐々した様子の中年男性。ですがぱっと見自分に変化はありません。

「恐縮ですが。仙人様の悩みというのは？」

「フム」といった様子の仙人は言います。
「聞いて驚け。……便秘じゃ」

胃腸が非常に弱い中年男性は、腹を抱え走り出しました。

「グワァー！ トイレー！」

「おしまい」

彼女

ここは一軒家。その玄関をノックする音が。

「はい。どうぞ」

ノブを回して入って来た人物は家主である彼女が高く見上げる程背が高い男性でした。男性は、彼女を見下ろしながら話し始めました。

「あなたは犬です」

「はあ！？ あなた、頭大丈夫なの？」

背が凄く高い男性は彼女に近付いて行きます。そして彼女をひよい抱き上げ囁きました。

「優秀過ぎたロボット犬の末路か……」

「おしまい」

青年と悪魔

ここは、アパート。

インターホンの音がしました。

「あ、はい」

この部屋の主である若い青年がドアを開けます。

「あれ？」

辺りを見回しますが誰もいません。気のせいかとドアを閉め振り返る青年。

「……どうも」

「……！」

振り返った青年の目に飛び込んで来たのは黒いスーツにグラスンをかけた角刈りの男でした。

「私は、悪魔です。あなたの願いを一つだけ叶えて差し上げましょう……」

自身を悪魔と呼ぶ人物からまがましい気配を察知した青年はその話を信じた。

「じゃあ……」

悪魔は付け加えるように言います。

「……ただし。あなたの寿命十年と引き換えです」

一瞬思案した青年でしたが、自分の年齢が二十三歳だということ
で願いを口にしました。

「僕の前に三億円置いて欲しい！」

悪魔は「パチン」と指を鳴らすと姿をくらましました。そして、
青年の前には数え切れない万札が現れました。

「ははっ！ これで僕も億万長者だ！ うん！？ くっ！」

青年は、心臓の痛みに膝を着き遂には生き絶えてしまいました。
青年が住むアパート。その屋上で先ほどの悪魔はニヤつきながら
呟きました。

「……自分が短命だとも知らずに……クククッ……」

{おしまい}

死神

ここは、アパートの一室。そこで大学生が胡座をかき寛いでいた。インターホンの音がした。

「あ、今開けます」

開いたドア。しかし誰もいない。

「いたずらかな？」

大学生は、戸を閉め振り返った。

「!?!」

そこには、赤いスーツを着込んだ恐持ての男が立っていた。

「……私は死神です。今見えなかったのが証拠です。それでは死んで頂きます!」

怯える大学生に右手の人差し指を向け赤い玉を飛ばした。

「イヤだ――!」

赤い玉は自身を庇う男の両手にぶつかった。死を覚悟する大学生。

しかし、なんともない。目を開ける大学生。周りに死神の姿は見当たらない。

「なんだ、気のせいかな」

そう言いながら右手で頭をかく大学生。

「……ない……！ 俺のふさふさな髪が！」

ここは、夜空。空を舞うさっきの死神。
「……私は毛根の死を司る死神。先程の大学生は何か誤解されていたようだな……」

「おしまい」

天使

ここは、アパートの一部屋。そこに住んでいるのは、中年男性でした。

するとインターホンの音がしました。

「あ、はい」

ドアノブを回し扉を開いた中年男性。しかし、誰もいません。

「まったく！いたずらかよ！」

ドアを閉め振り返る中年男性。

「！！！！」

「私は天使です。姿が見えなかったのがその証拠です」

振り返った男性の前にいたのは一枚の白い羽を羽ばたかせる美少女でした。

「願いを一つだけ叶えるためにやってきました。何か願い事がありますか？」

「……俺を世界一の金持ちにしてくれ！」

ニツコリと微笑むと天使は姿を消しました。それと引き換えに天使がいた場所から万札が溢れ出しました。

「ウハハハ！ 金だ！ 金だ！」

部屋いっぱいにお金がつめつくされても止まらずお札がバンバンでできます。中年男性はお札に顔以外を埋めながら言葉をもらいました。

「がふ！ もう、いい！ ストップ！グガガ……」

お金は止まらず出現し続け、中年男性は埋もれて動かなくなっていました。

「おしまい」

神様

ここは、アパートの一室。

インターホンの音がしました。立ち上がる家主である人間不振の男性。彼の人生にはろくなことがなかった。裏切り、つぶしあい、仲たがいなどなど。

「……はい。あなたはどなたですか？」

人間嫌いでもある彼はドアを押し開いた。

そこには、後光がさす美女がいた。

「私は神様です。不幸なあなたの願い事を三つだけ叶えてあげます」

それに、対し人間嫌いの男は息を荒くしながら――

「うそをつくな！ そんなもの（神様）は存在しない！ さっさと帰ってくれ！」

それに対し神様は答弁します。

「わかりました嘘はつきません。私はこの瞬間から神様ではなくなりました。分かりました出ていきます」

神様だった女性は悲しそうな表情を浮かべながらアパートを後にしました。

「おしまい」

楽しい夢販売所

『楽しい夢販売所』。そう書かれた看板を横目に来店する四十代後半の男。

自動ドアが左右に開いた。

「いらっしやいませ！」

出迎える一人の男。その小さな店には机と机を挟んだ二つの椅子、それと大きな棚それだけしかなかった。

「ささ、こちらへどうぞ」

店員に導かれ椅子に腰掛ける四十代の男。反対側に店員が座った。

「早速ですが、どういった夢をご要望でしょうか？」

店員の質問に質問で返す四十代の男。

「危険性や副作用はないんだろうな？」

「もちろんでございます。我々は安全安心第一を心情に商売させていただいておりますゆえ……」

「フム、ではハワイで一週間過ごす夢を売ってくれ」 店員は棚に近寄ると、引き戸を開けた。そして小箱を四十代の男に差し出した。

「この中の飴を寝る前に飲まれれば大丈夫です。お代は一万円になります」

支払いを済ませた四十代の男は帰路についた。

今は夜中の十一時。四十代の男は飴を舐めてから就寝した。

ここは、四十代の男が見る夢の世界。そこにはハワイの砂浜と透き通った海が広がっていた。

「ウハハハ！」

四十代の男は、海を平泳ぎで堪能していた。ひとしきり泳いだ男は砂浜に上がった。

「疲れたー」

「そこまでだ！両手を挙げる！」

四十代の男の周りには四人の警察官が取り囲んでいた。

「なんだ！？ どういうことだ！？」

疑問を口にした男に警官の一人が答えた。

「私達は夢パトロール部隊だ。あなたが現実の世界で三億円にのぼる脱税をしていたことは分かっている！ 現世であなたは逮捕づみです！ 早く目を覚ましなさい！」

なんとしたことが逮捕されてないのは精神だけとは……。

「おしまい」

殺し屋

ここは、大きな邸宅にある書斎。数々の本やら書類やらが棚や机に堆積する。そんな中、この主である大次郎が机に向かっていた。

そんな時書斎の戸口をノックする音が。

「はい。どうぞ」

大次郎の声と共に開くドア。入って来た人物は黒いスーツを着込み、その手には消音器付きの拳銃が握られていた。

「な！？　なんだお前は！？」

侵入者は「ツカツカ」と革靴を響かせ、大次郎に近づき向き合うとピストルの照準を大次郎に合わせこう言った。

「私は殺し屋です」

慌てはためく大次郎は無我夢中で説得する。

「ま、待ってくれ！　金なら払う！」

「いえ、金では駄目です。あなたには十六歳になったばかりの娘さんがいましたね？　彼女を私に下さい」

「！！！」

予想外の展開に動揺する大次郎。

「そ、そんな無茶な……」

「では、死んでもらいます……」

殺し屋は、引き金に人差し指をかける。その指に力がこも――

「分かった！ 分かったから止めてくれ！」

「では、娘さんとの結婚を許可してくれるんですね？」

「ああ……もう！ そうだ！」

根負けした大次郎の言葉にピストルを下ろす殺し屋。その殺し屋の後ろから大次郎の一人娘が現れた。

「ごめんねパパ……。相手（結婚相手）が相手だけに力押ししかないと思って……」

「おしまい」

前世

ここは、大きな邸宅。そのインターホンが鳴った。家主である男Aがドアを開け応対に出る。

「はい、どういった御用でしょうか？」

ドアの外に立っていたのはスーツを着込んだ青年だった。青年は快活に喋り始めた。

「前世の記憶をお届けにまいりました。差出人は前世のあなたです」

「前世！？ なんだい冷やかしかい？」

「いえ、違います。我々の会社は創立数百年の老舗でして……これがパンフレットになります」

青年が鞆から取り出したパンフレットに目を通す家主の男性A。

「確かに……しっかりした会社のようなだ。社名も知っているよ。そういう部署があつたのだね」

「はい。この袋に入ったカプセルを寝る前に服用されれば効用がでますので……」

そして、夜になりカプセルを飲んでダブルベットで眠りにつく男

性A。

ここは、男性Aの夢の中。そこは劇場。椅子に腰掛け喜劇を見る男性Aと妻と従者達。

（これが、俺の前世か……）

男性Aが感慨深げに辺りを見回していると後方から声がつきささった。

「リン。ーン大統領！ 覚悟！」

声と同時に「ズガン」という発砲音。弾丸は男性Aの後頭部に直撃していた。

「うわあー！」

そこで目を覚ました男性A。跳び起きる。

「あなた！？ 大丈夫？」

隣で寝ていた夫人が尋ねる。

「ああ、すまない……」

「変なカプセルなんて飲むから……。明日はテキサス州でオープナーによるパレードがあるのよ。ジョン・F・ケネディとしての……」

{#01#02#03}

忍者

ノックの音が。

ここは、一軒家。家主である中年男性が返事をする。

「あ、はい」

戸口を開けるとそこには黒い装束を全身に纏ったがたいの良い男が立っていた。その男は口づさんだ。

「私は忍者です。あなたには死んでもらいます……」

「何を馬鹿なことを。あなた頭大丈夫で……」

中年男性の腹に深々と突き刺さる刀。

「ぐふっ！……こんな……」

そこで息絶える中年男性。

今は江戸時代真っ盛り。頭がおかしかったのは……。

「おしまい」

夢

ここは、上流階級の朝の食卓。父母と子供の三人で食事をする。小学生になって間もない少年が喋り始めた。

「お母様。最近僕、同じ夢ばかり見るんだ」

「どんな夢を見るの？」

豪華な朝食を食しながら子供は母の問いに答える。

「それがね、いつも同じ夢なんだ。えっとね、まず日曜は……ロープで縛られてる夢で……」

食事を済ました父親が疑問を口にした。

「ロープ？ 嫌な夢だな。それに日曜はって、曜日によって決まった夢を見るのかい？」

「うん、そうだよ。それで月曜日がね……声が出ない夢。火曜日は狭い所に閉じ込められてる夢で水曜日は真っ暗な夢。木曜日は川を泳ぎ切り、金曜日は山を登り谷を越え、土曜日には楽園にたどり着いたんだ」

「変わった夢だな。さあもう行かないと学校に遅刻するぞ」

「わかったよ。パパ……」

ここは、場所は代わって通学路

「パパ達信じてなかったな……」

先程の子供が一人歩いていた。

とそこへ、一台の車が通りかかった。開くドア。覆面をした男達
が降りて来て少年をロープで縛った。そしてガムテープで口を塞ぎ、
車の荷台に小学生を詰め込んだ。動き出した車。

まさに一瞬の出来事だった。誘拐犯の力量がでていた。

狭く、暗い空間に閉じ込められた少年は考えていた。

（イタタ……正に夢の通りだ。狭い所に閉じ込められてる。次は川
を泳ぎ切り……出来るかなー？ ……その次は山を登り谷を越え、
最後には楽園にたどり着いたんだよね）

いつたい楽園とは……。

「おしまい」

流行り

サラリーマンの大次郎は通勤途中に紐を見つけた。しかもただの紐ではない、空から延々と延び下がつて大次郎の肩ほどの高さに紐は存在していた。

「……これはいったい？」

疑問を口にしながら大次郎はその紐が極めて甘美で魅力的に見えてしかたなかった。

大次郎以外の行き来する人間にはそれは見えていないようであった。みな何も無いかのように素通りしていくのである。

大次郎は、その紐を握らずにはいられなくなり両手でがっちり掴んだ。

「うん!？」

大次郎は浮遊感を感じ浮き上がったように思えた。大次郎はおもむろに下を見た。

「大丈夫ですか!？」

そこには、倒れた大次郎を中心としてちょっとした人だかりが出来ていた。大次郎に呼びかける青年。救急車を呼ぶ女性。脈をとる壮年の男性。

しかし、なぜか安寧な気分に戻る大次郎にはこれが当然の理であるかのように思われた。

大次郎の倒れた体は蟻のように小さく見え始めていた。

雲を抜けた先で紐は止まった。

「ここは……」

その大きな雲の上には見上げる程高い塔が建っていた。

「ここは天国です」

声のした方向に顔を向ける大次郎。そこには、二枚の白い翼を持った美しい顔立ちの女性が立っていた。

大次郎は口を開いた。

「あなたは天使ですか？ では私は死んだのですね？」

「そうです。私は天使であなたは死にました」

「人を天国に誘うときはいつもこういった方法を？」

「いえ、それは若い天使達の流行りです」

大次郎が辺りに目を凝らすと何人もの若い天使がロープを下に垂らしていた。

{#01#02#03}

天国

ここは、雲の上の天国。

「でも、天国に来て良かった。てっきり地獄に堕ちるものだとばかり……」

大次郎は、二億円に上る脱税をやらかしたことがあったのだ。

一对の翼を持った天使は大次郎に向かって喋った。

「天国は二十階級に別れています。大次郎さんは上から十四番目の階になります。こちらへどうぞ」

雲の上を歩き天使に着いていく大次郎。フニャフニャして柔らかい地面だった。

天使に案内されたのは雲の上の塔に設置されたエレベーターであつた。

「大次郎様は六階になります」

地上にあるものと同じ変わらぬエレベーターに二人が乗り込むと天使はボタンを押した。閉まるエレベーターのドア。浮遊感を与えながら動き出す。

「天使さん。階級の意味は何ですか？」

大次郎の質問と同時にエレベーターは開いた。著しい熱気がエレベーター内に流れ込んで来た。

「それはですね……善の行いから悪の行いを差し引いたものになります。階級が下になるほど死後の世界で……痛みや苦しみを感じるようになります」

大次郎がエレベーターから降りて真つ先に目に飛び込んできたものはぶくぶくとゆだつ大窯にマグマを噴き流す山々だった。

「この度、天国と地獄が合併致しまして……」

閉じ行くエレベーターのドア。大次郎の耳には途中までしか届かなかった。

「おしまい」

神様への直通電話

ここはとある公園。疎らに人が行き交う。青一色の晴天が冬の一日を温めていた。

ベンチに腰掛けさつき拾った奇妙な携帯電話を眺める高校生男子。学生服を気崩し不思議な携帯電話を凝視していた。

高校生が握る携帯電話には左から赤、白、黄色の三つのボタンがあった。試しに赤いボタンを押し携帯電話を耳に宛てがった。

すると、「プルル」と呼び出し音が。そして相手が出た。

「……もしもし、私は神様です。何か願い事がありますか？」

「ハハハ。神様？ ふーんじゃあ雨を降らして見てよ」

高校生は、青空を見上げながら意地悪く頼んだ。

「分かりました」

「うん!？」

空を見上げていた高校生の目に飛び込んできたのは暗雲がどこからともなく現れ空を支配する光景だった。

ついには「ポツポツ」と地面に小粒な雨が降り始める。徐々に雨

足は早まり、土砂降りに変わる。高校生は慌てて公園の公衆トイレに避難した。

「まじかよ!」

早速、不思議な携帯電話の赤いボタンを再度押し耳元に携帯電話を持っていく。神様から帰ってきた言葉は――

「一回きりです」

押し問答をする高校生。しかし結果は変わらず。

「ちっ! しょうがねえ。白いのを!」

奇妙な携帯電話の白いボタンを押す高校生。電話を耳に寄せる。

「……あい。神だがなんかようか?」

「願いを叶えて欲しいんだ」

「ああ、良いよ何?」

「俺の財布を万札でいっぱいにして!」

「あーいよ!」

喜び勇んで自分の財布を開く高校生。そこには万札どころか元本の五千円も無くなっていた。

頭に血が上った高校生は白ボタンを乱雑に押しまくる。

「何? 一回だけだよ」
と神様。

「なんで俺の財布の中が空になってんだ！ 意味がわかんねよ！」
「ああ、それは俺様があまのじゃくな神だからよ」

「ク、クソ！」

それで電話はきれた。もう一つ黄色のボタンがあったか。どうするか迷う高校生は頭を右手でおさえていた。
最後は恐る恐る人差し指でゆっくり押す。

「……もしもし、神様だよーん。願いはなんだよーん？」
うたぐり深くなった高校生は質問する。

「あんたはどんな神様なんだ？」

「みーは、命を司る神様だよーん」

「命！？ ふーん、じゃあいいや。パスで」

そう言つと高校生は奇妙な携帯電話をごみ箱に放り投げた。
しかし電話はまだ繋がっていた――

「おーい！ 寿命を延ばすべきだよーん！！ あなたは寿命が短命だよーん！」

奇妙な携帯電話を弄っていた高校生が鞆で雨から頭を庇いながら公園を出た時、トラックが突っ込んで来た。

「ププー……！！」

「おしまい」

宇宙人

ここは安いアパートの一室。あまり生活衛生上良くない物の散らかりかたを見せていた。住人は平凡な中年男性だ。そのインターホンが鳴った。

「あつ、はい」

ドアを開ける中年男性。しかし、そこには誰も居なかった。

「なんだ。気のせいか」

ドアを閉め振り返る中年男性。

「!!!!」

散らかった部屋の中に美人女性が立っていた。

「私は宇宙人です。見えなかったのが証拠です」

「な、なんのようなんだ」

中年男性はメタボな腹を摩りながら怯えていた。

「我が星では男性が不足していて困っています。我が星に来て小作りに励んでもらえないでしょうか？」

自身の平凡な毎日に嫌気がさしていた中年男性は一つ返事で返した。

「いいよ！ 行こう！」

「では、私の手を握ってください……」

美しい女性は右手を中年男性に差し出した。その手を両手で掴む中年男性。すると二人の姿は消え失せていた。

その後、中年男性は幸せに小作りに励みましたとさ。

「ギョエエー！」

しかし、中年男性は叫びながら走っていた。彼を追うのはこの惑星「球地」の女達。皆さん極めて美しい顔立ちをしていた。

「グワアアー！ 男は嫌だー！！！」

実はその星の女性は見た目が地球でいうところの男だったのだ。中年男性の女難（？）はまだまだ続くのであった。

「おしまい」

決闘

「私と勝負したいのはあなたなの。アイク」
カトリーナは余裕を感じさせる口調で話す。

「そうだとも、カトリーナ！ 勝負は何人の死傷者をだしたかでない？」

「ええ、もちろん。先手はアイクに譲るわ」

「いいだろう。俺の力を見せてやる！」

アイクの言葉と共にカトリーナは姿をくらました。

「アメリカを死のうずで覆ってやる！ くらえ！」

アイクの力は凄まじくアメリカから五百人を越す犠牲者を出した。

「どうだカトリーナ！？ 俺の力は？」

「ええ、なかなかだと思っわ」

姿を現したカトリーナは上から目線でものを言う。

それから年がいく年流れた。

「……ふふ。アメリカよ悲鳴をあげなさい！」

カトリーナが叫ぶやいなや大きな力が働き死者千八百三十六人、行方不明者も七百五人をだした。

「どう？ アイク？」

悔しそうな口調でアイクが話す。

「負けたよ……カトリーナ。君が最高のハリケーンだ……」

「おしまい」

雷神様

ここは、一人住まいの老人宅。そのインターホンがなりました。

「はいはい、今行きますからの……」

おじいさんはゆっくりとした足どりで一軒家の和室から玄関を指します。

ドアノブに手を伸ばすおじいさん。そして玄関の扉を開いた。

「誰もおらんのう……」

しかしそこには誰も居ませんでした。ドアを閉め振り返るおじいさん。

「うわっ!!」

そこには、雷柄の黄色いトランクスを履き、背中には円形に配置された十二個の小太鼓（叩く面が前を向いている）を腰に巻いた紐で担いだ上半身が半裸の男が立っていた。

「私は雷神です。お宅へ入室の際に見えなかったのが証拠です。おじいさんに折り入って頼みがあります」

雷神様に驚き、入れ歯が口から半分飛び出したおじいさんでした。入れ歯を手際よく直すと何もなかったように会話に参加します。

「……どんな頼みですかのー？」

「唐突ですが……雷神様を変わってくれませんか？ 不老不死になれますよ」

「雷神様！？ うーむ、不老不死は良いのじゃが……この老いばれにできるかのー？」

考え込むおじいさんに雷神様は明るい口調で話します。

「それは大丈夫です。雷神様になれば年齢が二十代になりますので……」

「せっかくだしやってみようかのう！」

そして話しはまとまった。

雷神様は腰に巻いた紐を解き玄関に太鼓を立て掛けた。さらに雷柄のトランクスを脱ぎおじいさんに差し出す。

「この雷神のパンツは洗濯は禁止されております。それと上半身は裸。これが太鼓を叩くバチになります。この十二個の小太鼓をそのバチで叩けば雷が落ちます」

おじいさんは意を決したように裸になり雷柄のトランクスを履いた。最初はブカブカだったパンツもおじいさんに徐々にフィットし始めた。何と最後には雷神様と同じ顔と体格になっていたのだ。

「雷神様これは！？」

振り返って雷神様を見たおじいさんの目に飛び込んできたのはついさっきまでの自分と全く同じおじいさんだった。

「入れ代わったのだよ。雷神様の仕事は一日に三人の人間に雷を落とすことです。できなければ天罰として雷があなたに落ちます。死にはしません。が段違いの痛みを伴います」

「……！ そんな話聞いとらん！ なかったことにしてもらいたいんじゃないが」

「嫌です。私はもう何千年と雷神様を勤めあげたのです。変わってほしければ他の人に頼んでください」

・ ・ ・

途方にくれた新たな雷神様でしたが雲に乗って空を飛んでいると気分が和らいました。

「なに、犯罪者を見つけて雷を落とせば良いだけの話。どこかに……！！ 警察官に追われている！ 悪く思わんでくれよ」

新たな雷神様はそう言うのとバチで小太鼓を叩きました。「ズギヤン！」と音をたて大きな雷が警察官達から逃げる男に落ちました。

ここは地上。雷が落ちた男は絶命していました。追いついた警察官二人は話します。

「運が悪いじいさんだな。雷が落ちるとは……」

「全くだ。食い逃げなんかするから……」

「しかし、変な事を言うじいさんだったな……」

「ああ。『自分は雷神様を置いてこっちの世界のことが疎いんだ！』だろう」

「おしまい」

悪魔のような天使

ここは、ある高速道路。そこで大渋滞が出来ていた。原因は大三郎氏のスリップ事故による玉突き事故だ。

大三郎氏は多量の血を流し朦朧とした意識の中で確かに何かが羽ばたく音を耳にした。

「くっ！」

転倒し、上下逆になった車の中で大三郎氏は沸き起こる怒りを感じていた。

足音が大三郎氏の車の開けっ放しの運転席の窓の横で止まった。

「大三郎さんまた会いましたね。まさに運命……」

大三郎氏は苦しげな声で会話します。

「うぐっ！……また貴様か……クソ天使……っ」

「ふふふ、大三郎さんが危険とあらばどこまでも……さて私の両手に二枚のカードがあります。片方のカードは生を、もう、一枚は死を大三郎さんにプレゼントするものです。右手と左手どちらのカードを選びますか？」

天使が持つ右手のカードの大三郎氏が見えない面には『生』と書かれてあり、左手のカードは『死』だった。

「くっ……左……」

「左手でよろしいですね？」

「うっぐっ……そうだ……早く……」

「……分かりました」

天使がそう言った瞬間、天使の左手のカードが『生』に、右手のカードが『死』に文字が変わった。

「はい、どうぞ！」

天使はそう言うや屈み込んで逆さ向きの大三郎氏に『生』のカードを見せ付けた。

「クソ！ まだいたぶるきか！？」

しかし、そこにはもう天使の姿はなく代わりに救急車やレッカー車、パトカーが到着していた。

助け出される大三郎氏や玉突き事故の重傷者立ち。

救急車で搬送される大三郎に向かって救急隊員はつぶやいた。

「また、あなたですか大三郎さん。今月にはいつて二十回目の搬送ですよ！」

大分容態が落ち着いてきた大三郎氏。彼は揺れる車の中で仰向けに横たわった状態で怒りのこもった口調で言った。

「……文句があるなら悪魔のような天使に言ってくれ！」

ここは、空。大三郎氏の前に現れた天使が空を舞っていた。彼は急に憤怒の表情を浮かべた。

「ムッ、大三郎さん。また私の悪口を言いましたね！ 悪魔のような天使とは！ 許しませんよ！ 次は……」

じごく耳の天使は何かを考える表情を浮かべながら猛スピードで空を飛んで行った。

まさに口は災いの元である。

「おしまい」

お帰り！

「ただいまー！」

「お帰り！ やしゃ孫よ」

家に帰ってきたやしゃ孫は楽しそうに言った。

「今日の同窓会は楽しかったよ！」

「そうか、良かったのう」

「ところでみんなは？」

おじいさんは暗い口調で言いました。

「わしら以外は成仏して旅だってしまったぞい……」

「そうか……残念だ。じゃあ、このお墓で二人暮らしだね」

「おしまい」

泥棒

ここはアパートの一室。住人は三十代の逞しい肉体を持つ男性だ。椅子に腰掛け雑誌に目を通していた。

インターホンの音が不意に鳴った。三十代の男は雑誌を机に置き立ち上がると玄関まで行き扉を開けた。

「俺は泥棒だ！ 金めの物を差し出せ！」

突然の来訪者の右手には鋭利な包丁が握られていた。

しかし物おじしないこの部屋の住人は言った。

「お前も運が悪いやつだな」

家主はポケットから拳銃を取り出し泥棒に向けこう言った。

「両手を上げろ！ 現行犯で逮捕する！」

なんと住人は……。

「おしまい」

警察官

ここは平凡な一軒家。家主は書斎で一人本を読んでいた。

そんな時インターホンが鳴った。今は月曜日の午前中。この時間帯にやって来る人物に見当がつかずに玄関を目指す家主の男。

「はい、今開けます……」

家主の男が玄関の戸口を開くと厚手のコートをはおった男が立っていた。その男は強い口調で言った。

「私は刑事です。あなたを現行犯で逮捕します！」

刑事と名乗る男はポケットから手錠と警察手帳を取り出し手帳を家主に見せながら家主に手錠をはめるため身を乗り出した。

家主の男は言った。

「待ってください！ 私はなにもししていません！」

「だからですよ。二十五世紀にはいつてからは働かないことは犯罪とする。そう決まったのですから……」

「おしまい」

福の神

あるボロいアパートに非常に貧乏な男が居ました。

突然インターホンが鳴ります。

貧乏な男は歳のわりによろよとした足どりで玄関に行き扉を開けました。

「……誰もいない」

貧乏な男はそう呟くとドアを閉め施錠し振り返りました。

「!?!」

そこには福々しい小太りの人物が片手に大きな白い袋を持ち立っていました。

「私は福の神です。私があなたの部屋に入室したのが見えなかったのがその証拠です」

「そうですか……どういったご用件でしょうか？」

「不幸なあなたに幸福をお持ちしました」

そう言つと福の神は袋から金の粉を取り出し貧乏な男に振り掛けました。

「なにも起きませんが……」

貧乏な男は呟きます。

「おかしい！　なぜなにも起こらないのか？」

福の神はそう言いながら何度も金の粉を貧乏な男にふりかけました。

とそこで貧乏な男が口を開きました。

「たぶんですけど……私の家系は貧乏神に呪われていると……代々語り継がれていまして……」

なんと恐ろしき貧乏神の呪いかな……。

「おしまい」

安全装置

今は西暦二千百年。不景気が長く続き大量殺人等を犯す「キレる」人間が多々世の中を乱し続けるそんな時代。

政府は、この難題の解決をはかるためある装置を開発した。

ここはとある公園。向き合う二人の男。両人血走った目から常軌を逸した様相が伺える。

「おい！ お前には悪いが死んでもらうぜ！」

長いナイフを握る男が真剣を抜き上段に構える男に向け声を荒げた。それに真剣を構える男が言葉を返す。

「それは、こっちの台詞だ！ 行くぞ！」

真剣を振りかぶりながらナイフの男に詰め寄り刀を振り下ろし――

また、ナイフを持つ男も一步も退かず凶器を突き出した――

『キーン！』という高音が殺しあう二人ののうずに響き渡った。

「うぐっ……」

膝をつく真剣を持つ男。

「くはっ……」

ナイフの男も頭を押さえながらうつづくまる。

立ち上がった二人は凶器をその場に残し歩み寄りどちらともなく握手した。

「悪いことをした。許してくれ」

と元ナイフを握っていた男。

「ああ、もちろんさ。こちらこそ悪かった。すまん」

そう言ったのは元刀を持っていた男。

その二人は抱き合いお互いが互いを褒め、励ましあった。

これは政府が開発した安全装置による効能である。安全装置とは、人が「キレる」状態に入ると作用する空気中に散布されている特殊な成分によるものであった。

「おしまい」

暗い世界

「今日も暗い、この狭い空間には嫌気がさす……」

彼はただ一人暗く小さな世界にいた。そこは彼にとって酷く窮屈であつた。たまに小さな衝撃やこの世界自体が回転したりする。そんな世界と彼。

「!」

浮遊感を感じる彼は動揺する。何かに掴まれた感触がした。

徐々にこの暗い世界に光が差し込んでくる。まるで皮をむくようにである。

と不意に女子の声が聞こえた。

「みかん食べよつと」

（そうか私はみかんだったのか……）

「おしまい」

雨

神々の住まう世界。その一宅で頭を抱え悩む一人の神様がいた。

「うーん……どうしたものか……」

彼は雨を司る神様。悩み事は飢えた貧しい国々に雨ではなく栄養満点の神の世界のスープを降らすかどうかだ。

「やはりほうっではおけん！」

雨の神様は神の世界の法に触れるのを知りながらスープを雨の代わりに降らせた。

飢餓に苦しむ人々は大変喜んだ。

ここは貧しい某国。そこにスーツの男性に物乞いする見るも無惨な男の姿があった。

「おねがいします！ 助けてください！……」

その声の主はどことなくあの雨の神様に似ていたような……。

「おしまい」

偶然（前書き）

久しぶりの投稿です。拙い作品ですがどうか温かい目で見てやって
ください m (_ _ _) m

偶然

留守宅を泥棒が物色中にインターホンが鳴った。

「！！　ちっ！」

インターホンが鳴り続けるので頭を巡らし、その家の人の友人のふりをして応対にでる泥棒A。

「はい。今あいつは留守にしまして……」

「俺は泥棒だ！　痛いめをみたくなければ金をだしな」

新たな訪問者、彼もまた泥棒であつた。

「いや、えーと……」

最初の泥棒Aは困惑していた。

「さつさと金を出せ！」

迫ってくる泥棒Bの手にはナイフが握られていた。

泥棒二人が玄関内で問答しているとまたインターホンが鳴った。

「！！！！」

外から勝手に開かれる玄関のドア。そこから現れたのは――

「死にたくなかったら有り金を出しな！」

なんとまた……。

{#02#03}

偶然（後書き）

コメントや評価等いただけると大変やる気がでます。もし、よろしければ一言でも嬉しいのでお願いしますm（――）m

タイムマシン（前書き）

拙い作品ですが見てやってください m (——) m

タイムマシン

「ついに出来たぞ！ タイムマシン」

そう言ったのは三十五歳の男性A氏。ここは男性宅の地下室。いろんな機材やらが置かれている。

「これを使えば……」

彼の手には懐中時計が握られていた。これこそがタイムマシンだった。

「二十年経って結婚してから知った……過去で両思いだったあの人に告白できる」

A氏は、高校時代を想像しタイムマシンを握りしめた。渦巻く空間、そこにA氏は吸い込まれて行った。

ここは過去の時代。A氏は高校の校門で、高校生のA氏に自分が未来から来たことを説明し好きなあの子に告白するように言いました。

「わかったよ。試しに告白してみる！」

学生のA氏はそう言つと告白しに走り去った。

現代に戻ったA氏。しかしなにも変化がない。不審に思ったA氏

は過去に戻り過去のA氏に質問した。

「なぜ告白しなかったんだ？」

それに過去のA氏は答える。

「したけどふられたんだ」

その言葉に現代へ戻り高校生の時好きだったあの子に電話で確認する。

「本当に高校生の時にぼくのことを好きだったの？」

電話の相手は答えた。

「ああ、もちろん好きだったとも。俺の友人としてな……」

なんと相手は……。

「おしまい」

タイムマシン（後書き）

感想や評価もらえたらやる気です。もし、よかったらお願いします
ますm () m

デスチャンネル（前書き）

ちよつとホラー？です。

デスチャンネル

ここは二千百年。

人命の尊さを知るために開発されたのがデスチャンネルだった。これは死に直面した人物を特殊な衛星（透視できる）が発見しテレビに映し出すものだった。しかし、救助に向かいに行く程の時間はなかった。

S氏はデスチャンネルを見ていた。

そこは、高層ビルの屋上。暗い顔をした男性が立っていた。

そしてビルより飛び降りる男性。

「彼はなぜ自殺を……」

二人目に映し出されたのはS氏の妻だった。

「なっ！！」

動揺するS氏。

横断歩道の信号が青に変わり横断歩道を渡り始める妻。

『えっ！』

とそこへ信号無視の乗用車が突っ込んできた。空中を舞う妻。地面に叩きつけられて動かなくなった。事故を知ってか知らずか走り

去る乗用車。

「なんてことだ……まさかひき逃げされるとは……」

茫然自失のS氏。デスチャンネルに新たな人物が映し出された。その人物は背中を向けテレビに見入っていた。その人物の後ろ姿はS氏と酷似していた。

「ええっ!？」

腰を抜かすほど驚いたS氏は恐る恐る後ろを振り返った。

そこには振り上げられた斧と覆面の人物――

「おしまい」

釣り

とある海岸に釣りをしている男がいた。

「おっ！」

彼の竿に当たりがきた。

喜んだのもつかの間、逆にものすごい力で海の中へ引き込まれた男。

「うわ！ んぐ！ ……」

そして海の中で意識を失う男。

「うん！」

目を覚ます男。そこは巨大なまな板の上だった。辺りには調理器具がいたる所に置かれていてまさに調理場だ。

「やっと目が覚めたか」

男が声の方を見ると顔は魚の頭に体は人間といった不思議な生物が立っていた。そして不思議な生物は言った。

「今日は男の人間が釣れたぞ。ご馳走だな！」

{おしまい}

来世

ここは死後の世界。一つの魂（火の玉）が翼を持つ天使と会話していた。

火の玉に天使が言った。

「あなたが来世になることができるのは以下の三つの内の一つです。……一つ目は貧乏な家の美男子……二つ目は大金持ちの家の超絶不細工……三つ目はランダムで選ばれる……この三つの内から一つ選んでください」

青い火の玉は言った。

「うーん。じゃあ……」

ここは病院。一人の赤ちゃんが誕生した。それは先程の火の玉であつた。

その赤ちゃんの両親はボロイ服を着ていた。

もしや一つ目を火の玉は選んだのだろうか。

「おぎゃー!」

しかし、赤ちゃんの容姿はどう、誰が見ても醜いとしか表現できない……。

なんと悲惨なランダムか……。

{#01#02#03}

未来地球からの使者（前書き）

久しぶりの投稿です。感想等いただけたら嬉しいですm——m

未来地球からの使者

ここは日本。

円盤型の宇宙船が広い公園に着陸した。そして姿を現す宇宙人。その姿は人間の男性と酷似していた。

「爆発……」

そう言つと倒れる宇宙人。

宇宙人は医療が完備された施設へと移される運びとなつたのだが宇宙人となると治療に困るしまつであつた。

幸い宇宙人は軽傷だつたらしく元気を取り戻しつつあつた。

各国の政府が来星目的を尋ねるが記憶喪失らしく「爆発」という言葉を口ずさむだけだつた。

宇宙人が来星してから十年の月日がながれた。

ここは、宇宙人を保護している施設。あの宇宙人が記憶を取り戻し次のように叫んでいた。

「宇宙船を増設し地球から逃げだすんだ。地球が寿命で爆発するぞ！ 私は未来の地球から来た使者だつたのだ」

しかし時すでに遅く地球全土が揺れ始めた。

「おしまい」

死亡診察機

二千三十年。ここ日本で人の死ぬ日と死亡理由がわかる機械「死亡診察機」が開発され各病院に配置された。

人々は病院に押し寄せ死亡日と死亡理由を知りたがった。

「死亡診察機」はカプセルの中に入った人物を検査し結果をだすものだった。

死亡理由が肺ガンとでたものはタバコをやめたり、人生の時間が極めて短い者は自身の預貯金をきりくずし豪遊したりした。

そんななか機械が――

『死亡日、死亡理由共に不明』

と死亡診察機で解析出来ない人物が数百人も現れたのだ。機械の故障も見受けられず病院の医師や死亡診察機の作成者達もなぜなのか皆目見当がつかなかった。

立派で豪勢な家が立ち並ぶ住宅街の一つの家でソファで寛ぐ三人の人物が会話を楽しんでいた。

「死亡診察機は診断してくれたかい？」

と夫は言った。

「いいえ、やっぱりだめだったわ……」

残念そうな口調で奥さんは答えた。

「やはりエヌビー」星人は死亡診察機では死亡日とその理由を知ることができなかったか……」

なんと宇宙人は地球の社会にとけこみ生活していたのだった。

「おしまい」

仕事薬

サラリーマンであるA氏は朝八時にスーツ姿で重宝している自作の薬『仕事薬』（錠剤）を水で喉の奥へと流し込んだ。

「うっ！」

A氏はそう言うつとベットに倒れ込み意識を失った。これは『仕事薬』の効用によるもので、この薬を飲むと寝ている間に自分の代わりに仕事をしてくれる便利なアイテムなのだ。

A氏でなくなった者は目を覚まし起き上がり働きに出ていった。

夜中の八時。自室のベットで意識を取り戻したA氏。しかし、今日はいつもと違った。

「うっ！　なんだこれわ！」

A氏の服に大量の血が付いていたのだ。

「なんで血が！　俺はサラリーマンなのに！」

立ち上がり足早に風呂場に向かうA氏。その晩はなかなか寝付けなかった。

次の日の朝、A氏はここ三年飲んできた『仕事薬』を飲まず自身

で会社に行くためにスーツを着込んでいた。その時A氏の携帯電話が鳴った。恐る恐る電話にでるA氏。

「……………もしもし？」

「ああ、お前か。前は中々の出来だった。次に殺して欲しいターゲットは……………」

A氏は腰を抜かさんばかりに驚いた。いつのまに転職したのやら……………。副作用がでたのかも……………。

「おしまい」

告白

男には好きな女がいた。とても綺麗な女性で片思いというやつだった。日に日に思いは強まっていく。

そして男は告白することを決意した。肌寒い冬の日、男は公園に女を呼び寄せた。

女は質問した。

「用ってなあに？」

男は言った。

「えっとその……………」

そしてついに男は女に向かって言った。

「付き合ってください！」

それに女は少し間をおいて答えた。

「私は二十歳。あなたいくつになったの？」

男は答えた。

「八歳です！」

{おしまい}

告白2

男には好きな人がいた。素敵な人だった。片思いというやつだ。日に日に思いは強まっていく。

そして男は告白することを決意した。肌寒い冬の日には男は公園に相手呼び寄せた。

相手は聞いた。

「用ってなに？」

男は言った。

「えっと、実は……………」

そしてついに男は相手に向かって言った。

「結婚してください！」

それに相手が答えた。

「無理だよ」

男は質問した。

「なぜ？」

相手は答えた。

「お互い男だからさ」

{おしまい}

告白3

男には好きな相手がいた。素敵な相手だった。片思いというやつだ。日に日に思いは強まっていく。

そして男は告白することを決意した。肌寒い冬の日には男は公園に相手呼び寄せた。

相手は静かに黙っていた。

男は言った。

「えっと、実は……………」

そしてついに男は相手に向かって言った。

「結婚してください！」

それに相手は無言だった。

「……………」

男は質問した。

「なぜ黙ってるんだい？」

相手は答えた。

「にゃー」

{おしまい}

告白 4

男には好きな相手がいた。素敵な相手だった。片思いというやつだ。日に日に思いは強まっていく。

そして男は告白することを決意した。肌寒い冬の日、男は公園に相手呼び寄せた。

相手は静かに黙っていた。

男は言った。

「えっと、実は……………」

そしてついに男は相手に向かって言った。

「結婚してください！」

それに相手が答えた。

「£%#&*」

男は質問した。

「なんだって？日本語で話してくれない？」

相手は答えた。

「私は宇宙人、人間とは結婚できません」

{おしまい}

神様の判決

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入って来たのは痩せた人間の男だった。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と痩せた男は椅子に座り机を挟んで対峙した。

神様は言った。

「あなたは食料難の国に生まれ飢餓で命を落とした。そうですね」

「はい、ですから来世は食料の豊富な国に生まれたいです」

「わかりました。そうしましょう」

ここはアメリカの農場。

そこに人間から生まれ変わった一匹のいなごがむしゃむしゃと畑を荒らし回っていましたとさ。

{おしまい}

神様の判決2

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入って来たのは天使とウサギだった。

天使はウサギを残して部屋から出ていきました。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様とウサギは椅子に座り机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは猟師に撃たれ食べられた。そうですね」

ウサギは言った。

「はい、ですから来世は人間を倒したいです」

「わかりました。そうしましょう」

ここは宇宙。地球のすぐそば。そこには、千に及ぶ宇宙船があった。

その一つの宇宙船内にウサギから生まれ変わった一体のリーダー格の宇宙人が千に及ぶ宇宙船に地球人抹殺の命令を下しましたとさ。

「おしまい」

神様の判決3

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入って来たのは織田信長だった。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と織田信長は椅子に座り机を挟んで対峙した。

神様は言った。

「あなたは明智光秀に討たれ死んだ。そうですね」

織田信長は言った。

「はい、ですから来世は光秀を討ちたいです」

「わかりました。そうしましょう」

ここは日本。

そこに織田信長から生まれ変わった一匹の熊が明智光秀の生まれ変わったキツネを殴り倒し、噛み付きましたとき。

{おしまい}

神様の判決 4

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入って来たのは天使と一匹の蚊だった。

天使は部屋から出て行った。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と一匹の蚊は椅子に座り机を挟んで対峙した。

神様は言った。

「あなたは生まれて初めて人の血を吸おうとして命を落とした。そうですね」

「はい、ですから来世は人の血を確実に吸ってみたいです」

「わかりました。そうしましょう」

ここは某国の病院。

そこに蚊から生まれ変わった一本の注射器が人の血液を吸ってい

ましたとき。

{おしまい}

神様の判決5

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入って来たのは一体の天使と一匹の肉牛だった。

天使は部屋を後にしました。

神様は言った。

「私の前まで来てください」

神様は椅子に、一匹の肉牛は立ったまま机を挟んで対峙した。

神様は言った。

「あなたは肉牛として売られ食べられ命を落とした。そうですね」

「はい、ですから来世は食べる側にまわってみたいです」

「わかりました。そうしましょう」

ここは某国の街中。

そこに肉牛から生まれ変わった一匹の巨大な人食いの怪物が人々

を食っていましたとさ。

{おしまい}

神様の判決 6

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入って来たのは一体の天使だった。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と一体の天使は椅子に座り机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは人の命を救おうとして命を落とした。しかも人の命を救えなかった。そうですね」

「はい、ですから来世は人の命を救えるようになりたいです」

「わかりました。そうしましょう」

ここは某国の病院。

そこに天使から生まれ変わった名医が次々と人々の命を救っていました。

{おしめい}

神様の判決 7

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入って来たのは一人の女だった。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と女は椅子に座り机を挟んで相對した。

神様は言った。

「あなたは占い師をしていたが全く当たらず、貧窮して命を落としました。そうですね」

「はい、ですから来世は当たる占いができるようになりたいです」

「わかりました。そうしましょう」

「ここは某国。」

そこに女から生まれ変わったノストラダムスが預言をしていましたとさ。

{おしめい}

逃走

一人の男は森の中を全力で走っていた。頬を汗が伝う。後ろから追っ手の気配を感じる男。

「はあはあ……」

男はさらにスピードを上げて疾駆する。

男の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。とても進めそうにない。男は足を止めた。

そして、男は人の気配に恐る恐る振り返った。

そこには不細工な女が立っていた。女は怒った口調で言った。

「あなた！ 初めて私のスピンの顔を見たからって逃げることはないじゃない！」

「おしまい」

逃走2

一匹の巨大な熊は森の中を全力で走っていた。後ろから追っ手の気配を感じる大柄な熊。

熊はさらにスピードを上げて疾駆する。

熊の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。とても進めそうにない。熊は足を止めた。

そして、熊は生き物の気配に恐る恐る振り返った。

そこには小さな子犬がいた。大型の熊は怖がった口調で言った。

「こ、怖いから来ないでー」

犬が苦手な大柄の熊は子犬を見ながら震え上がっていた。

「おしまい」

逃走3

一人の脱獄囚の男は森の中を全力で走っていた。頬を汗が伝う。後ろから追っ手の気配を感じる男。

脱獄囚の男はさらにスピードを上げて疾駆する。

脱獄囚の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。

脱獄囚は足を止めた。

「俺もここまでか……」

脱獄囚は人の気配に恐る恐る振り返った。

そこにはラーメン屋の従業員の男が立っていた。ラーメン屋の従業員は疲れた口調で言った。

「お客さん！ お釣りを忘れてますよ！」

脱獄囚は言った。

「はあはあ、なんだ警察官じゃなかったのか……」

「おしまい」

逃走 4

一人の銀行強盗は森の中を全力で走っていた。頬を汗が伝う。後ろから追っ手の気配を感じる強盗の男。

強盗の男はさらにスピードを上げて疾駆する。

男の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。

男は足を止めた。

「俺もここまでか……」

男は人の気配に恐る恐る振り返った。

そこには透き通った女が立っていた。

強盗の男言った。

「な、なんだおまえは!？」

女は淡々とした口調で言った。

「私はあなたの守護霊です。警察はまきましたから安心して下さい」

{おしまい}

逃走5

一人の男は森の中を全力で走っていた。頬を汗が伝う。後ろから追っ手の気配を感じる男。

男はさらにスピードを上げて疾駆する。

男の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。

男は足を止めた。

「俺もここまでか……」

男は気配に恐る恐る振り返った。

そこにはなぼろい服を着た半透明な男が立っていた。半透明な男は言った。

「私は貧乏神です。私から逃げ出すことは不可能です」

男は言った。

「はあはあ、俺じゃなく他の人間にとりついてくれればいいのに……」

{おしまい}

動物会話機

博士は動物の言葉が分かる機械、動物会話機を発明した。

発明には長い年月を要した。博士も八十五歳になっていた。

博士は飼い犬ポチに動物会話機を使いながら話しかけてみた。

博士は言った。

「おはよう」

ポチは黙っていた。

『……』

「おかしいな？言葉は通じてるはずなのに……」

博士はめげずにポチに問いかけた。

「気分はどうだい？」

しかし反応しないポチ。

『……』

そんな時、博士の長男が博士の部屋へ入って来た。

「親父、犬の置物になに話してるんだ？」

ポチじゃなかった。

「おしまい」

動物会話機 2

博士は動物の言葉が分かる機械、動物会話機を発明した。

発明には長い年月を要した。博士も八十五歳になっていた。

博士は飼い犬ポチに動物会話機を使いながら話しかけてみた。

博士はポチに言った。

「おはよう」

ポチは言った。

『おはよう』

「おお！ 言葉が通じたぞ！」

博士はポチに問いかけた。

「気分はどうだい？」

ポチは言った。

『あんた、最近調子にのってるだろ。立場は私の方が上よ！』

博士はポチの言葉にへこんだ。

「おしまい」

動物会話機 3

博士は動物の言葉が分かる機械、動物会話機を発明した。

発明には長い年月を要した。博士も八十五歳になっていた。

博士は飼い犬ポチに動物会話機を使いながら話しかけてみた。

博士はポチに言った。

「おはよう」

ポチは言った。

『おはよう』

博士は言った。

「おお！ 言葉が通じたぞ！」

ポチは言った。

『おお！ 言葉が通じたぞ！』

博士はポチに問いかけた。

「わしのまねをしているのかい？」

ポチは言った。

『わしのまねをしているのかい？』

博士は怒ってポチに言った。

「なぜわしのまねをするんだい？」

ポチは言った。

『なぜわしのまねをするんだい？』

それから一時間ほど博士とポチのやり取りは続き根負けした博士はポチと話すのを止めてしまった。

どうやらポチの性格は捻くれ者のようだ。

『おしまい』

動物会話機 4

博士は動物の言葉が分かる機械、動物会話機を発明した。

発明には長い年月を要した。博士も八十五歳になっていた。

博士は飼い犬^{ポチ}に動物会話機を使いながら話しかけてみた。

博士はポチに言った。

「おはよう」

ポチは言った。

『おはようございます』

博士は言った。

「おお！ 言葉が通じたぞ！」

ポチは言った。

『喜んでもらえて幸いです』

博士はポチに問いかけた。

「気分はどうだい？」

ポチは言った。

『心臓が苦しいです』

博士はポチに言った。

「なに？ 心臓が苦しいだと」

ポチは言った。

『はい……』

それから動物病院にポチを連れていった博士。獣医によると心臓の病気にかかっているとのこと。手術が決まった。

動物会話機が初めて役に立った瞬間であつた。

『おしまい』

捜査

刑事は一人、犯人を追っていた。

犯人の隠れ家を遂に見つけ、張り込んでいた。遂に突入の時、刑事に緊張がはしる。

蹴り開けたドア。拳銃を構える。

刑事は言った。

「大人しく、手を挙げる」

しかし建物内に人の姿はなかった。

そのかわり机の上に置き手紙があった。そこには以下のように書かれていた。

『あなたへ

私を捕まえようと躍起になり、このアジトがばれたのもわかっています。料理を作っておいたので温めて食べてください。いつまでも愛しています。

妻より
』

「おしまい」

捜査 2

刑事は一人、犯人を追っていた。

犯人の隠れ家を遂に見つけ張り込んでいた。
遂に突入の時、刑事に緊張がはしる。

蹴り開けたドア。拳銃を構える。

刑事は言った。

「大人しく、手を挙げる」

建物内には一匹の熊がいた。

驚く刑事。

「な！」

熊が立ち上がり襲い掛かってきた。拳銃で応戦する刑事。

なんとか熊を追いつ立てることに成功した。

部屋には置き手紙があった。内容は以下の通りだ。

『札付きの悪より

この手紙を読んでいるということは俺が捕まえた熊を倒したとい
うことだろう、流石は俺のライバル……』

そのさきは血に汚れて読めなかった。

部屋から、壊れた檻と犯人の死体が見つかった。どうやら熊に食

ぐらねてしまったようだ。

「おしまい」

捜査 3

刑事は一人、犯人を追っていた。

犯人の隠れ家を遂に見つけ張り込んでいた。
遂に突入の時、刑事に緊張がはしる。

蹴り開けたドア。拳銃を構える。

刑事は言った。

「大人しく、手を挙げる」

建物内には同じ顔の男が三人いた。

驚く刑事。

「な！ 整形手術か!？」

右端の男達は言った。

「人相の悪い男に整形手術をうけられました」

真ん中の男は言った。

「俺はなにも悪いことはしていない」

左端の男は言った。

「俺は犯人じゃない」

刑事は言った。

「三人とも警察署まで来てもらおう」

犯人は簡単に分かった。顔は変えられても指紋までは無理だったようだ。

{おしめい}

時間よ止まれ

長年の研究の末、博士は時間を止める腕時計を開発した。

「やった、ついに出来た！ これで私は大金持ちだ！」

博士は試しに腕時計の時間を止めるスイッチを押した。

[illegible]

時間を止める腕時計はどうやら博士の時間も止めてしまう失敗作だったようだ。

止まってしまった時間が動き出すかは定かではない。

おしまい

時間よ止まれ2

長年の研究の末、博士は時間を止める腕時計を開発した。

「やった、ついに出来た！ これで私は大金持ちだ！」

博士は試しに時間を止める腕時計のスイッチを押した。

「街へでてみよう」

ここは人で賑わうストリート。しかし人間達はぴくりとも動かない。

博士は言った。

「実験は成功だ！ 時間を元に戻してみよう」
博士は時間を元に戻すボタンを押した。

しかし、ストリートの人々は固まったままだ。

「なぜだ！？ この！」

博士は何度もボタンを押したが変化は現れなかった。

博士は呟いた。

「そんな……これからは地球でたった一人で生きていけないといけないのか……」

「おしまい」

時間よ止まれ3

長年の研究の末、博士は時間を止める腕時計を開発した。

「やった、ついに出来た！ これで私は大金持ちだ！」

博士は試しに時間を止める腕時計のスイッチを押した。

「街へでてみよう」

ここは人で賑わうストリート。しかし人間達はぴくりとも動かない。

博士は言った。

「実験は成功だ！ 時間を元に戻してみよう」
博士は時間を元に戻すボタンを押した。

しかし、ストリートの人々は固まったままだ。

「なぜだ！？ この！」

博士は何度もボタンを押したが変化は現れなかった。

博士は呟いた。

「そんな……これからは地球でたった一人で生きていけないといけないのか……」

「そんなことないわよ」

「！」

博士が声の方を振り向くと一人の女が立っていた。

博士は言った。

「なんで動けるんだ!？」

「私が悪魔だからよ。人間の作ったものなんかの影響はつけないわ」

「目的はなんだ」

「ただの暇つぶしよ。私がその時間を止める機械を治してあげましようか？」

「できるなら頼む!」

「ただし、あなたの時間を数年いただくわ」

「わかった、頼む」

悪魔はなにやら呟いた。

「さあ、治ったわよ」

「すまない、ありがとう」

博士は時間を動かすボタンを押した。

時間は動き出した。

ある街のストリートに腕時計のボタンを押したまま固まっている博士の姿があった。

悪魔は言った。

「三年間あなたの時間を止めらしてもらっわ。キャハハハハハ」

「おしまい」

時間よ止まれ 4

長年の研究の末、博士は時間を止める腕時計を開発した。

「やった、ついに出来た！ これで私は大金持ちだ！」

博士は試しに時間を止める腕時計のスイッチを押した。

「街へでてみよう」

ここは人で賑わうストリート。しかし人間達はぴくりとも動かない。

博士は言った。

「実験は成功だ！ 時間を元に戻してみよう」

博士は時間を元に戻すボタンを押した。

すると街の人々は動きだした。

博士は言った。

「よし、完璧だ」

「ちょっとすいません」

博士は声の方へ顔を向けた。そこには黒いスーツの男が立っていた。

「なんだい？」

「あなたはどうかやら大変な機械を作ってしまったようだ」

「だれだ！？ 目的はなんだ？」

「未来の警察ですよ。そんな未来を変える力のある機械を見逃すわけにはいかないな」

未来の警察は指を鳴らした。すると博士の時間を止める腕時計は砂に変わった。

「な！？」

「悪いですがこれが仕事なもんでね」

そう言つと黒いスーツの男は姿を消した。

後に残されたのは悲しみにくれる博士であつた。

「おしまい」

喧嘩

大二郎は言った。

「君みたいな女性は二度とごめんだ」

理香は言った。

「それはこっちの台詞よ。あなたみたいな人は嫌よ」

「そうかい、なら離婚しよう」

「のぞむところよ。それと今回の離婚の理由はあなたの浮気にあるんだからね」

「それはわかっているよ。でも前回の離婚の理由は君の浮気のせいじゃないか」

「それを言うなら前々回の離婚の理由はあなたの浮気よ」

二十回の結婚と十九回の離婚を繰り返している両者、今後どうなることやら。

{おしまい}

喧嘩 2

ここは芝居小屋の一室。

大二郎の頬に健二のパンチが炸裂した。大二郎が鼻血をながしながら健二に飛び掛かった。そして仰向けの健二に馬乗りになって両手で健二の首を絞め始めた。

大二郎は言った。

「よくも俺の女を寝とったな」

健二は苦しそうに息をしている。

その部屋に猿の調教師と精神科医が入って来た。

精神科医は言った。

「大二郎さん、あなたの奥さんは二年前に交通事故で亡くなったんです。いい加減受け入れてください」

猿の調教師も言った。

「大二郎さん、健二は猿なんですからあなたの奥さんが生きていても浮気なんてしませんよ」

「おしまい」

当たり屋

月が空を支配する夜9時。閑静な住宅街の道で一人の男が車にしかれ倒れた。

男をひいた神崎さんは車から下り倒れた男に駆け寄った。

神崎さんは言った。

「だ、大丈夫ですか？」

しかれた男は言った。

「ええ、なんとか……」

「慰謝料は払います。救急車は呼びますか？」

「慰謝料はけっこうです。救急車も呼ばなくて大丈夫です。そのかわり……」

「なんですか？私に出来ることでしたらなんでもおっしゃってください……」

「実は神崎さん……」

「な、なんで私の名前を知ってるんだ。うん？よく見ると娘の彼氏じゃないか」

神崎さんは娘の彼氏をよく思ってなく結婚にも反対だった。

しかれた男は言った。

「さつき、私に出来ることでしたらなんでもおっしゃってくださいと言いましたね……」

「だったらなんだと言っただ？」

「僕に娘さんをください……」

{おしまい}

夢

大二郎は夢を見ていた。その夢は以下の通りだ。

ナイフを持った殺し屋が大二郎に凶器を向け言った。

「悪いが死んでもらう」

「待て金なら払う！」

「いくら払える？」

「金庫に一千万ある。どうだ？」

「残念だが私が貴様を殺して貰える報酬は二千万だ……死ね！」

殺し屋は大二郎の腹にナイフを深々と突き刺した。

そこで大二郎は目を覚ました。腹部に激痛を覚え目をやるとナイフが深く突き刺さっていた。

大二郎の意識は遠のいていった。

（刺されたのは夢じゃなかったのか……）

「おしまい」

時間よ戻れ

科学者は時間を戻す置き時計を完成させた。戻すだけで他に機能はない。

科学者は試しに時間を戻すスイッチを押した。

すると凄いスピードで時間が巻き戻っていった。

科学者は赤ちゃんになり、そして消えてなくなり。

科学者の家も無くなり、木々が生い茂った。そして恐竜達が跋扈する時代になった。

その時、ティラノサウルスの足が時間を巻き戻す時計を踏み潰した。

やっそこさ巻き戻しが止まった。

効力が強すぎたようだ。

「おしまい」

扉

少年は通学路を歩いていた。するとそこに扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだった。

少年は好奇心を掻かれた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには――怪しげな部屋があり机の上の水晶玉を椅子に座り覗き込む老婆の姿があった。

老婆は言った。

「勇者様。ようこそおいでになられました」

少年は中に入って扉を閉めた。少年は言った。

「あなたは誰ですか？」

「私は王宮使えの魔法使いです。どうか、この世界を救ってください」

それから少年の異世界での大冒険が始まるのでした。

{おしまい}

扉2

少年は通学路を歩いていた。するとそこに扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだった。

少年は好奇心を掻かれた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには――机に肘をつき、椅子に座った恐ろしげな男がいた。

少年は扉を閉めの中に入った。

恐ろしげな男は言った。

「私は閻魔だ。死者でない者がなんのようだ？」

少年は扉のことを話した。

閻魔は言った。

「なんと！ 人間の世界と繋がっているだと！」

「はい」

「よく、教えてくれた。褒美にお前に一度だけ現世で悪さをしても天国に送ってやろう」

少年は現世で仲が悪かった不良を殴ったそうな。

「おしまい」

扉3

少年は通学路を歩いていた。するとそこに扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだった。

少年は好奇心を掻かれた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには——
広い草原が広がっていた。

少年は扉を閉め、また開いた。

するとそこには大海原が広がっていた。少年は波に引き込まれてしまった。

そして扉は閉まった。

その後、少年の行方を知る者はいなかった。

「おしまい」

扉4

少年は通学路を歩いていた。するとそこに扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだった。

少年は好奇心を掻かれた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには――肉食の恐竜がいた。

少年は急いで扉を閉じようとしたが噛み付かれてしまった。少年は暴れたが最後は飲み込まれてしまった。

そしてひとりでに扉は閉じた。

「おしまい」

扉5

少年は通学路を歩いていた。するとそこに扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだった。

少年は好奇心を掻かれた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには――
一体の神々しい天使が立っていた。

天使は言った。

「あなたにはこの扉が見えたのですね？」

少年は言った。

「はい」

「では天国へ行きましょう。この扉が見える人を連れていくことになりました」

それ以来、少年の姿を見た者はいなかった。

「おしまい」

コンキ

あるところによく当たると有名な占い師がいました。
サユリさんはその占い師に占ってもらっていました。結果は以下の通りでした。

「コンキが近づいてくるでしょう」

サユリさんは言った。

「婚期！」

サユリさんはたいへん喜んで帰路に着きました。

それからのサユリさんは仕事が忙しくなり、婚期が近づいてきた様子はいつこうにあらわれません。

「婚期が近づいている様子なんて全くないわね。最近は忙しくて根気がある仕事ばかりね！」

ふとサユリさんは気がついた。

「ま、まさか、婚期……コンキ……根気！」

「おしまい」

戒（いまし）め

俺にはどんなことがあっても守らねばならぬ戒め^{いまし}がある。

どんなことがあろうが戒めを守らねば大変な惨事にみまわれてしまふ。

ほんの少しの油断がどれほどの苦しみを俺に与えたことが。

「やべ会社に遅刻する。でもトイレに行きたい」

俺は時間に追われながらも公園のトイレに駆け込んだ。

俺は尿を全て放出し、ホッと一息ついた。その時、俺の脳裏を会社に遅刻してはいけないとよぎった。

俺は性器をしまつのを忘れチャックを上げた。

「ぐわああー!!」

戒めを忘れていた瞬間だった。皆様もご用心を。

（おしまい）

もし三人いたら

最初の人間はアダム（男）とイヴ（女）とソラ（男）の三人いた。
禁断の果実を食べ三人は変わった。

三人の内二人はを愛する相手めぐって殺しあいを始めたのだ。

その戦いは三人の内二人が愛し合った結果、二対一の戦いになった。
った。

ついに三人の内一人が死んだ。愛し合った二人が勝った。愛の力が勝利をよびこんだのだ。

勝った愛し合っている二人は喜び抱き合った。そして激しいキスをかわした。

生き残った一人は言った。

「愛してるわアダム（男）」

そして生き残ったもう一人も言った。

「愛してるよソラ（男）」

二人はホモだったのだ。

「おしまい」

告白

「付き合ってください!」

風が涼しい秋の昼間。公園でスポーツ刈りの前田健介まえただけんすけは告白した。相手は容姿が非常に整った白井由利しらいゆりだ。由利は驚きを口にした。

「あなたも私と付き合いたいの?」

健介は驚いた口調で言った。

「え、誰か他の人からも告白されているのかい?」

「ええ、そうよ」

健介は気になりさらに質問した。

「なんていう男だい?」

「えとね……沢井孝司さわいこうじさんでしょう……それから……」

「それからって一人じゃないのかい?」

「ええ、そうよ。……それに大橋大二郎おおはしだいじろうさんでしょう……それに泥谷大介じやだいすけさん……それと……」

困惑した健介は聞いた。

「いったい何人の男性から告白されてるんだい?」

由利は普通の調子で言った。

「今日だけで、あなたでちょうど百人目よ」

「おしまい」

飲む者

私は飲んでいる。とても美味しい味がする。飲む時はばれないようにこっそり飲む。なんともいえない緊張感がたまらない。私はひそかに飲むのが上手な方でいまだ飲んでいるところを見つけたことはない。明日も飲みに行こう。

連れだつて飲みに行くこともある。その時はお互い慎重に慎重を重ね飲みに行く。飲んでいるところを見つかりと殺されても文句もいえない。仲間が殺されることなんてざらにある。飲むことはとても危険なことなのだ。

今日は煙りで目眩がする。どうやら人間達が蚊取り線香をたいていたようだ。わたしはついには意識を失った。

「おしまい」

不運

彼、前田賢太はとても運の悪い男だった。というのも小さな不運は、よく筆筒の角に足の小指をぶつけるのだ。当たらないように意識していてもぶつけてしまう。彼にはどうすることも出来なかった。

また、大きな不運はよく雷に打たれて死にそうになることだ。今まで両の手で数えられないくらい落雷をくらっていた。幸い命には別状はなかった。だが大変な痛みを伴った。これからも雷に打たれることだろう。それを考えると死んでいた方が幸せだったかもしれない。

そしてまた、前田賢太に新たな不幸が迫っていた。それはご機嫌ななめな、このストーリーを書いている作者のまの手だ。作者の悪意は前田賢太を襲った。

前田賢太は公園で子供が掘った、深さ一メートルほどの穴に落ちて命もおとしましたとさ。

〜おしまい〜

ミス

ここは崖っぷち。一人の女が三人の男に囲まれていた。女の後ろには大海原が広がっていた。

三人の男の内、筋肉隆々の男が言った。

「お嬢さん、盗み出した核弾頭の発射装置を渡せ！」

「嫌よ！」

別の細い男が女ににじり寄ろうとした。すると女は鞆からなにやら手乗りサイズの機械を取り出した。目鼻立ちが整った肌の白い女は言った。

「これが核弾頭の発射スイッチよ」

男達は慌てた様子をみせる。筋肉質の男は言った。

「待て！ はやまったことを考えるんじゃない」

女は残酷な笑みを見せ言った。

「こうなったら、やけっぱちよ。えい！」

女は核弾頭の発射スイッチを押した。緊張がはしる。

映画監督が言った。

「はい、カットー！ 四人共良い演技してたよ」

スタッフが演技をした四人にジューズを渡しながら言った。

「核弾頭のスイッチ、押さなかったよね」

「あ、押しちゃいました……」

「なんてことを！ リアリティを出すために本物の装置を借りてきたから押すふりだけっていったのに……」

ここは某国。核弾頭が飛来、爆発し何万人もの犠牲者をだした。

「おしまい」

渡せー！

日が暮れて夜になった。月が眩しく輝いている。今は肌寒い冬。ここは某国の公園。そこで男と女が怒鳴りあっていた。厚手のコートを着た男は言った。

「渡せー！」

厚手のドレスを着た女は言い返した。

「なにをよ！ さては強盗！？」

男は詰め寄りながら叫んだ。

「いい加減渡せー！」

女は段々怖くなって言った。

「あんたは何がほしいのよ！？」

男は女にさらに近づき言った。

「渡さなければ奪い取るぞー！」

女は相手の男をいかれた強盗だと思い鞆をできるだけ遠くに投げた。

「欲しければあげるからとってきなさいよ」

しかし男は鞆に見向きもせず白雪のような肌の女に言った。

「渡せー！」

男は女に走りよって来た。その時男の顔に月明かりが当たった。女は迫り来る男の顔を見て絶叫した。男の顔には目や鼻や口、眉が無かったのだ。

男は女を押し倒し女の顔を掴んで言った。

「お前の顔渡せー！」

「おしまい」

地球最高

まあだたかし
前田孝志は眠っていた。ここは彼の夢の世界。そこは青々と茂った森を円形に切り取った公園だ。公園のベンチに腰掛けた孝志は羽が背中から生えた人と話しをしていた。羽が生えた人は自分は天使だと名乗った。

天使は言った。

「孝志さんあなたを地球最高の人間にしてあげましょう」

孝志は言った。

「地球最高？」

「そうです。ではご機嫌よう」

孝志は自室のベッドで目覚めた。外から叫び声が聞こえてきた。孝志はパジャマのまま外にでた。すると巨大な宇宙船が人間達を地上から吸い上げていた。次々に吸い込まれていく人々。ついには孝志一人が地球に残された。

夢は正夢となり孝志は地球最高の人間になったのだった。

「おしまい」

作者

「さて何を書こうかな」

小説を書こうとパソコンに向かう太田敬一郎^{おたけいいちろう}。彼の部屋は大量の本で溢れていた。

「……」

敬一郎はパソコンをカタカタと操り文章を書いていく。次々に生まれる文。なかなか作成スピードが速い。

「……」

敬一郎には好きな女性がいた。名を貞子^{さだこ}という。二人の馴れ初めは保育園時代、敬一郎が悪口を言われる貞子を庇ったことだ。

(……苛々する)

二人の仲の良さはおりがみつきで週に一回はデートをしていた。今週はショッピングに連れだってでかけ、気に入った服を購入していた。その後は中華料理屋で食事を済ませホテルに――

「さつきから煩いぞ作者！ 人が小説を仕上げてる最中にごちゃごちゃと！ 集中できねえじゃねえか！」

あら、すいません。どうやら聞こえてたみたいです。では、今日はこのへんでさようなら。

{おしまい}

選挙

慌ただしく走り回る選挙用車両。開いた窓から立候補者が手を振っている。箱型の長めの車両のスピーカーから言葉が発せられた。

「前田大二郎です。前田大二郎をよろしく願います」

ついに議員を決める選挙の日がやってきた。何十億人の人が選挙に参加した。選挙の候補者は二人。一人は日本人の前田大二郎さん、もう一人はアメリカ人のエドワード・ニューゲートさんだ。

そしてテレビで開票速報がながれる。二人の得票数は肉薄していてなかなかどちらが有利とも言えなかった。

ついに全ての票が出揃った。勝ったのはエドワード・ニューゲートさんだ。エドワード・ニューゲートさんはテレビにでた。家族と喜びあったり支援者と握手をかわしていた。

テレビのアナウンサーは言った。

「宇宙議員地球地区に選ばれたのはエドワード・ニューゲートさんです」

今は西暦三千百年。宇宙が統合された、そんな時代。

（おしまい）

大きな願い

季節は初春。山田和子^{やまだかずこ}は家の台所で冷蔵庫から取り出した卵をまな板の上に置いた。すると白い艶のある卵は揺れ始め、所々にひびがはいりついには卵のからを破ってなにかが現れた。卵の中から姿を現したものは十センチぐらいの小さな人で背中に翼があり頭の上に黄色く輝くわっかを持っていた。

和子は大いに驚きながらも言った。

「あなたはなんなの？」

小さい人は言った。

「私は生まれたばかりの天使です。そんなことよりあなた何か願い事ないですか？」

「願い事？」

「そうです。私達天使は大きな願い事を叶えると大きく成長できるんです」

「じゃあ私を日本一のお金持ちにしてよ」

「願いが小さくて駄目です。もっと大きな願いにしてください」

「え……じゃあ世界一の富豪にして」

「まだまだ小さいです」

「そ、それなら宇宙一のお金持ちにして！」

「わかりました。どうぞ！」

天使はそういうと姿を消した。

そして空から和子の家に向かって長さが十メートルはあろうかという分厚い札束が何万個も降り注いだ。潰れる和子の家。和子の生死は定かではない。

先程の小さかった天使は大人の男性と同じぐらいのサイズになり空を舞っていた。天使は言った。

「貨幣価値が最も高い純金を含む、巨人が住むハムラビ星の札束は人間にはちよつと無理だったかな」

「おしまい」

未来手帳

三月一日

大二郎氏は会社からの帰宅途中に道端で一冊の手帳を拾った。
「未来手帳？」

大二郎氏は表紙を読み手帳を開いた。
一ページ目には以下のように書かれていた。

『この手帳の未来の日に何かを書き込めばそれが現実になる……』
「まさかあ……」

大二郎氏は鞆に未来手帳をいれ帰路についた。

三月三日 夜

今は夜。大二郎氏は自宅のアパートで未来手帳に向き合っていた。
「暇つぶしに……」

大二郎氏は適当な気持ちで未来手帳に以下のように書き込んだ。

『三月四日』
課長に昇進する』

「なったらな。なんてな。そろそろ寝るか……」

三月四日

大二郎氏は会社に出勤した。そして通路の掲示板の周りにちょっとした人だかりができていることを知り近づいていった。

「大二郎さんよ」

「ホントだ」

大二郎氏は掲示板に貼られた紙を目にした。

『辞令

山本大二郎 営業三課 課長に昇進』

大二郎氏は驚きから声がでなかった。

三月四日 夜

「やったぞ！俺はすごい物を手に入れた！」

大二郎氏はアパートで大騒ぎしていた。

「ハハハッ！未来手帳を使えば社長にだってなれる！いや、待てよ……そうだこうしよう！」

未来手帳に大二郎氏は次のように書き記した。

『三月五日

神様になる』

三月五日 早朝

「おい神よ！ 目を覚ませ！」

「うんっ？」

眠りから覚めた大二郎氏の視界にとびこんできたのは二枚の翼を持った神々しい人物だった。

眠気が覚めた大二郎氏は布団から出て立ち上がり聞いた。

「……天使さんですか？」

「そうだ天使だ」

「私は神様になったのですか？」

「そうだ。だから私がここにいる」

大二郎氏は布団の上でガッツポーズを決めていた。

（やったぞ！ 全ての頂点、神様になれた！ しかし、それにしては天使の態度が不自然なきが……）

「私は神様になったのでしょうか。それなのに天使さんの態度はどういった理由で？」

天使は未来手帳を机から取り上げながら答えた。

「この世の順位は第一が天使。第二が全ての生物。最下位に位置するのが天使の使いである神だ」

それを聞き驚き、崩れ落ちる大二郎氏。しかし、未来手帳を思い出して天使につめよる。

「その手帳を返してください！」

「駄目だ。これは私がいただく。神のくせにえらっそうだぞ！」

「そんな……」

世界の頂点に立つはずだった大二郎氏は真逆の立場に……。

「おしまい」

家畜

秋の清涼とした風が吹く十月。家畜小屋の中で値段交渉が行われていた。買い手は言った。

「まるまると太っていて身が詰まっているようだ。一匹あたり二十ぐらいで売ってくれないか？」

家畜の売り手は言った。

「二十はひどい。せめて一匹あたり三十にしてもらいたいんだが」
買い手は言った。

「七十匹買うから一匹あたり二十五にしてくれないか」

売り手は言った。

「七十匹買ってくれるなら一匹あたり二十七で売ろう。どうだろうか」

買い手は言った。

「わかった。七十匹で一匹あたり二十七で買おう」

売り手は言った。

「商談成立だな」

その時家畜の一匹が言った。

「嫌だ、まだ死にたくない！」

他の家畜も言った。

「俺も死ぬのは嫌だ！」

売買されていた家畜の正体は人間だったのだ。そして地球は宇宙人に占領されていたのだった。

「おしまい」

クリーム1

「貴社のチーズが腐って変色していたぞ！」

「まことに申し訳ありません」

「おたくの牛乳、酸っぱい味がしましたわよ！」

「まことに申し訳ありません」

「君のとこの練乳苦くて駄目だよ！」

「まことに申し訳ありません」

上記のように株式会社○○のクリーム対応課は大忙し。一日に数百件の苦情が寄せられる。椅子に腰掛け電話対応に追われていたデル・スミスは少しの間をみつけコーヒーマーカーでコーヒーを入れ自分の席に戻った。するとデルの机の上の電話が鳴り響いた。うんざりしながら受話器をとる。

「はい、株式会社○○です」

「あなたがたの会社ではサービスといたずらをされてますの？」

「は？ サービスといたずらですか？」

「ええ、牛乳の中に指輪が入っていましたの」

「いえ、多分こちらのミスです。すいません。それがサービスのほうですか？」

「そうよ」

「では、いたずらの方はどういったものですか？」

「指輪に細長い指がついておりましたの」

「おしまい」

クレーム2

「貴社のチーズが腐って変色していたぞ！」

「まことに申し訳ありません」

「おたくの牛乳、酸っぱい味がしましたわよ！」

「まことに申し訳ありません」

「君のとこの練乳苦くて駄目だよ！」

「まことに申し訳ありません」

上記のように株式会社○○のクレーム対応課は大忙し。一日に数百件の苦情が寄せられる。椅子に腰掛け電話対応に追われていたデル・スミスは少しの間をみつけコーヒーマーカーでコーヒーを入れて自分の席に戻った。デルは仕事だが度重なるクレームにいらいらしていた。デルは受話器を取り適当に電話番号を押した。すると相手がでた。

「はい、もしもし……」

デルは溜まったストレスを発散するように言った。

「 그리스大統領의 馬鹿野郎！ 그리스大統領의 能無し！ この役立たずが！」

「なんだと！ お前はどこの誰だ？」

「株式会社。。。に勤めるデル・スミスだ！ お前こそ誰だ？」

「私は現大統領のグリースだ」

「え！？」

「株式会社。。。のデル・スミスだな、どうなるか覚えていろよ！」

翌日の朝、散歩中の老人が砂浜を歩いていると変死した死体が発見された。すぐ側に財布と免許証が落ちていた。免許証には……デル・スミスと書かれていた。

「おしまい」

ブラックジョーク1

「映画館で」

男「リアルな映画だなー。あのライオンなんか画面から飛び出してるようじゃないか」

アナウンス「お客様方！ ライオンがこの映画館に侵入しました！
急いで逃げてください！」

「食卓で」

子供「ママ、この焼肉変わった味がするね」

母親「そうよ。なんせアメリカ産なんですもん」

子供「最近、ママに言いよってくるアメリカ人のチャーリーさん見かけないね」

母親「ええ、もしかしたら誰かに食べられていたりしてね」

「電気を消した食卓で」

男A「さて、みんな闇鍋をはじめよ。ルールは取った食材は必ず
食べること」

女A「じゃあ私からいくわね。うん？ なにこれ、手足が五本ある
生き物？」

男B「あ、ごめん調理中に手を切り落としちゃってさ」

「公園で」

男の子A「お医者さんごっこしよう」

男の子B「いいよ。ってなんで包丁持ってるの?」

男の子「手術しようと思って」

「おしまい」

ブラックジョーク2

「事務所で」

ヤクザ「借りた金を返して貰おうか？」

男「すいません。あと一週間だけ待ってください」

ヤクザ「なんだ、返すあてがあるのか？」

男「いえ、夜逃げするんです」

「美術館で」

夫「この裸体画、どこことなくお前に似てるな」

妻「あら、分かった。実は私がモデルなの」

夫「しかし、それにしてもスタイルが良すぎないか？」

「写真展で」

男「この夕日の写真が綺麗だろ。だるま夕日っていうんだぜ。俺のお気に入りの写真なんだ」

女「あなた、それ本物のだるまよ」

男「え？」

「料理店で」

客「この本日限定獅子人なべって何？」

店員「はい、それはライオンの肉と人の肉を使った料理です」

客「へー、珍しいね。ライオンの肉なんかどうやって仕入れたの？」

店員「動物園から逃げ出したライオンを店長が命を捨てて捕らえたんです。人の肉の方はライオンに噛まれて死んだ店長の肉です」

「おしまい」

ブラックジョーク3

「結婚式場で」

来賓「あなたが新郎さんですか？」

新婦「いいえ！ 新婦です！」

「のろいのプリンター」

「あなた知ってる？ のろいのプリンターって」

「え、呪い？ 恐そうね。でも聞きたいから続きを教えて」

「そのプリンターを使うとね……」

「使うと？」

「仕上がるまで……とても鈍いのよ」

「路上で」

ドライバー「へい、彼女。俺とデートしないかい？」

美女「おじいさん、あなたがあと五十歳若かったらね」

「庭で」

母親「坊や、庭の木にくくりつけたロープで遊ぶのは止めなさい！」
坊や「えー、昨日パパだって動かなくなるまで首を吊って遊んでたよ」

「警察署で」

醜い女「恋人の彼が忽然と姿を消したんです」

警官「そうですね。あなたの顔を見ていると彼の気持ちが分かります」

{おしまい}

ブラックジョーク4

「高台で」

女「綺麗な景色ね。遠くまで見えるわ」

男「そうだね。素晴らしい情景だ」

女「私も遠くへ行ってみたいわ」

男「ここから飛び降りると、とても遠くへ行けるよ」

「占い小屋で」

占い師「あなたの顔に死相がでています！」

客「そうだろうね」

占い師「なんでそんなに落ち着いているんですか？」

客「僕は昨日、車に敷かれて死んだばかりだからね」

「海岸で」

男「珍しいな、あそこにセイウチがいるよ」

女「違うわ。寝転んだ、ただの太ったおばさんよ」

「浜辺で」

男「僕と付き合ってください！」

女「いいわよ。えい！（肘で男を突く）」

男「いた！ 何をするんだ？」

女「え？ 突きあうんでしょ」

「おしまい」

ブラックジョーク5

「図書館で」

婚約者（女）「何を読んでるの？」

婚約者（男）「白紙の本を読んでるんだ」

婚約者（女）「何が面白くてそんな書物を読んでるんの？」

婚約者（男）「友達が言うには、じーっと見ていると文字が浮かび上がるらしいんだ」

婚約者（女）「……からかわれたんじゃないの？」

婚約者（男）「うん！浮かびあがったぞ」

婚約者（女）「なんて？」

婚約者（男）「婚約は白紙だって……」

「台所で」

妻「あなたは、運命を信じてるんでしょう？」

夫「ああ、そうだよ」

妻「魚をさばいてたらお腹から離婚届けが出てきたの……離婚してくれる？」

「結婚式場で」

来賓「奥さん綺麗ですね」

新郎「そうかい、ありがとう」

来賓「着ているドレスがね」

「おしまい」

ブラックジョーク6

「庭で」

お隣りさん「きねを持っってますね。もちつきですか?」

男「いえ、寝ている妻を叩こうと……」

「新年会で」

男A「今年の抱負はありますか?」

男B「不倫は三人までにする! ですかね」

「忘年会で」

女A「今年、何か嫌なことあった?」

女B「姑がね……」

女A「なに?」

女B「百十四歳なのに元気満々なのよ」

「会議で」

社長「私は最近餅まきを試みてたくてね」

幹部「はあ」

社長「もうすぐボーナスの時期だよね」

幹部「そうですね。それがなにか？」

社長「次のボーナスは屋上から金まきにしようか」

「おしまい」

ブラックジョーク

「記者会見で」

重役「今回は汚水でたいへんなご迷惑をおかけしまして……」

キャスター「汚水？ 今日発明品の発表記者会見ではないんですか？」

重役「しまった！」

「家で」

？「僕と結婚してください」

女「無理よ」

？「なぜですか？」

女「あなたがオウムだからよ」

「川で」

少年A「少年Cはバタバタとバタフライで泳いでるね」

少年B「違う！ あれは、バタバタとおぼれてるんだ。早く助けな
いと！」

「城で」

兵士A「お姫様！　こんな夜遅くに遊びにでられては困ります」

姫「もう、わかったわよ（部屋の中に入る姫様）」

兵士B「兵士A、なんで大きな声をだしてるんだ？」

兵士A「姫様が夜遊びをされていたので注意していたんだ」

兵士B「姫様？　国王には王子様だけしかないぞ」

「おしまい」

ブラックジョーク8

「寝室で」

夫「ちょっと！ 君のいびきがうるさくて眠れないよ！」

妻「私だっ てあなたのいびきで寝てないわよ！」

夫「え？ 俺はまだいつすいもしてないよ」

妻「私も寝てないわよ」

夫「じゃあ、さっきのいびきは？」

犬「グー！ グググー！ グガガー！」

「不思議な世界で」

女の子「美しいお花畑、かわいらしいちょうちょ、流麗な小川、雄々しい山々……ここはどこかしら？」

老人「（川のむこうぎしから）こっちへおいでー、天国へおいでー」

女の子「あ！ おじいちゃん！」

老人「うん！ 奈津子か！ こっちへ来たら駄目だ！」

「会議で」

社長「不景気を乗り越えるいいアイデアはないかね」

社長以外の会議参加者達「社長がおやめになられたら……」

「星空の下で」

女「あ、流れ星！」

男「ほんとだ。でもこっちに落ちてきてないか？」

女「きゃー！」

{おしまい}

ブラックジョーク9

「病院で」

患者「いつになったら退院できますか？」

医者「さあ、わかりません」

患者「なんで退院できる時期がわからないんですか？」

医者「あなたがいつ亡くなるかわからないからです」

「豪邸で」

夫「今日釣りに行ってただろ。そこでさ海老で鯛を釣ったんだ」

妻「私も海老で鯛を釣ったことがあるわよ」

夫「へえ、そうなのかい」

妻「実はね、整形手術をしてあなたを釣りあげたの」

「消防署で」

隊員A「S地区で燃え上がってるらしいぞ」

隊員B「火事だね！」

隊員A「いや、奥さんが浮気をした旦那さんに火がでるほど怒ってるらしいぞ」

「観光地で」

夫「立派なお城だね」

妻「ええ、そうね。一度でいいからお姫様になってメイドに命令してみたいわ」

夫「いつも命令してるじゃないか。俺にああしろ、こうしろって」

「おしまい」

ブラックジョーク10

「道場で」

男A「たのもー!」

師範「さては道場やぶりだね」

男A「看板は貰っていくぞ!」

師範「よかろう私が相手になろう」

男A「もういいでしょう（道場から立ち去る男A）」

師範「?」

師範「! やられた看板を持って行かれた! 陽動作戦だったのか!
! 奴はおとりか!」

「教会で」

神父「隣人を愛しなさい」

女「神父様の言うとおり隣人と愛しあったら夫に家から追い出されちゃったじゃない!」

「採掘場で」

男A「ダイナマイトは仕掛けてきたか？」

男B「はい」

男A「では爆破の準備にはいれ」

男B「しかし、女Aがいません」

男A「うん、俺の妻（女A）はダイナマイトの側で気絶させてきたんだ。着火開始！」

「ゴルフ場で」

男A「俺はドライバーが得意なんだぜ」

男B「では実力拝見といこうか」

男A「（ドライバーで球を打つ）」

男B「なんだ。百ヤードぐらいしか飛んでないじゃないか」

男A「違うよ。俺の得意なのは運転のほうのドライバーさ」

「おしまい」

ブラックジョーク11

「動物園で」

子供「パパ！ ライオンと飼育員さんがじゃれあってるよ」

父親「！ 飼育員さんが頭から血を流してるじゃないか！ 襲われてるんだ。助けを呼ばないと」

「公園で」

男の子「（砂場を掘っていて）あれ？ 何か埋まってるよ」

女の子「女の人だね……かくれんぼしてるのかな」

「畑で」

女A「あの野菜見て。まるであなたの足のようね」

女B「細いにんじんね」

女A「いえ、あの太い大根よ」

「お花畑で」

女A「綺麗なお花畑に勇壮な自然……素敵ね」

女B「ええ、そうね」

女A「まるで天国みたいね」

女B「ええ、そうよ」

女A「え？」

「おしまい」

ブラックジョーク12

「喫茶店で」

女A「あなた最近太った？」

女B「ええ、最近美味しいお菓子を探して食べるのにこつてるの」

女A「そうなの。そういえば二日前にあなたの旦那さんを見たけど
痩せていたわよ」

女B「そりゃそうよ。私が食べる係りで夫が探す係りですもの」

「公園で」

女の子A「おままごとしよ」

女の子B「じゃあ私がお父さんであなたがお母さんよ」

女の子A「あなたお帰りなさい。ご飯にするそれともお風呂？」

女の子B「ひー、お前の言う通りにするからぶたないでくれー」

女の子A「なんでそんなこと言うのよ。おままごとしゃないじゃない
い」

女の子B「私のお父さんがいつも言ってるからよ」

「旅館で」

客「この部屋は他の部屋の二倍の料金だとか。さぞ良い部屋なんでしょうな」

番頭「いえ、二人分のお値段なんですよ」

客「なに、私は一人で泊まるつもりだが」

番頭「いえ、この部屋の壁に人が一人、埋められてるからです」

「おしまい」

ブラックジョーク13

「家で」

妻「あなた、今日から毎日家事をやってくれるの?」

夫「ああ」

妻「どうしてそんな気になったの?」

夫「じゃあ言うぞ……お前が余命三ヶ月って医師から聞いたからな……」

妻「そうなの……じゃあ、私も言うわね。私はお医者さんにあなたが余命一ヶ月って聞いたわよ……」

「パーティーで」

女A「盛大なパーティーね」

女B「そうね。豪華よね」

女A「ところで何を祝うパーティーなの」

女B「えと、うーん。わからないわ」

女C「私も知らないわ」

主催者「実は僕も知らないんです……」

「居酒屋で」

男A「最近どうだい？」

男B「給料が三十万円になったんだ」

男A「良かったな！ 昇給おめでとう！」

男B「でも前は五十万円だったんだぜ」

「家で」

子供「（豆をまきながら）鬼はうち！ 鬼はうち！」

父親「坊や逆じゃないかい？」

子供「お父さん言ってたじゃないか、お母さんが鬼みたいって」

「おしまい」

ブラックジョーク14

「家で」

子供「僕、ニンジン嫌いだーい」

父親「ここら、好き嫌いしたら駄目だよ。君はもう二十歳になつたんだからね」

「台所で」

奥さんA「今日はあなたが家事する番でしょ？」

奥さんB「昨日あなただってしなかったじゃない！」

旦那「ストップストップ！ 今日もいつもどおり僕が家事をやるよ！」

「家で」

子供「僕、身長が百四十センチメートルに伸びたんだよ」

祖父「そうか、良かったね。わしなんか百四十センチメートルに縮んだぞ」

「遊園地で」

男の子「お化け屋敷怖かったね」

父親「ああ、よく出来てたな」

男の子「パパ。人形さん持ってきたらだめだよ」

父親「？」

男の子「肩に足のない女の子の人形がのってるよ」

父親「幽霊だー！」

「お化け屋敷で」

お化け（人）「うらめしやー！」

お化け（人）「あれ？ おかしいな。人の気配がしたのに」

お化け（人）「なんだい、人の肩を叩いて……あれ……また誰もいない……」

お化け（人）「うわ！ 耳に息を吹きかけるなよ……周りを見ても誰もいない……ギャーお化けがでたー！」

「おしまい」

ブラックジョーク15

「騒がしい飲み屋で」

男「私の妻を事故にみせかけ殺してほしいんだ」

殺し屋「それはできません」

男「なぜだい？」

殺し屋「あなたを殺すよう依頼された人物だからです」

男「うぐっ！ 貴様酒になにかまぜたな……（倒れる男）」

「占い小屋で」

百パーセント当たる占い師「あなたの手相を見るかぎり今日あなたは銀行強盗を行い大金を手にいれるでしょう……」

男「そうか！ 銀行強盗は成功するんだな。はい見料。ありがとうございます（足早に立ち去る男）」

百パーセント当たる占い師「……しかし十分後に警官に取り押さえられるでしょう」

「湯舟で」

子供「息の止めあいっこしようよ」

父親「いいよ。じゃあいくよ。いっせーのーで！」

（三十秒後）

父親「ぷはあ！ 苦しかった。俺の息子はなかなか我慢強いな」

（三分後）

父親「おーい。もうそろそろ息をしたらどうだ？ うん？ 口が開いている！ おい大丈夫か！？」

「おしまい」

交換1

今は少し肌寒い春。ガリア氏がベットで寝ているとインターホンが鳴った。ガリア氏は目を覚まし起き時計を見た。するとまだ朝の三時だった。ガリア氏はインターホンを無視しようと寝返りをうった。しかしチャイムは鳴り続けた。しかたなく起き上がり寝ぼけたままドアを開けた。するとそこには初老の男性が大きな鞆を持ち立っていた。おじいさんは、

「あなたの持ち物全てと一億円を交換しませんか？」

そう言った。

ガリア氏は寝ぼけて頭をかきながら喋った。

「本当ですか？」

「ええ、これをご覧なさい」

そう言うと老人は鞆を地面に置き開いた。ガリア氏もかかんで覗き込む。鞆のなかにはたくさんの一万円札の束が入っていた。

ガリア氏は眠いながらも興奮してこの話を承諾した。するとどこからともなく数人の黒スーツの男達が現れガリア氏のアパートにある財布、通帳、はんこ以外の物を全てどこかへ運び去った。

老人は1億円入った鞆をガリア氏に渡した。喜ぶガリア氏。老人はそれを見るとその場をあとにした。それを手を振り全裸で見送るガリア氏。

老人は階段を下りながら呟いた。

「あの男、服も電話もなしにどうやって外出するつもりなのか？
ふふふ、やはり寝ぼけている朝早くが狙い目じゃな。これだから金
持ちの道楽はやめられん」

「おしまい」

交換2（前書き）

久しぶりの投稿です。感想や評価などいただけたら励みになります。
よかったです。よろしくお願いしますm（――）m

交換2

とある一軒家。そこで昭夫が一人、居間でテレビを見ていたらインターホンが鳴った。玄関に行きドアを開ける昭夫。外には青白い顔をしたスーツ姿の男が立っていた。その男は言った。

「私は死神です。あなたの命と十億円を交換しませんか？」

昭夫は面食らって、

「死神？ そんなばかな」

と言った。すると死神はポケットからナイフを取り出し自分の腹に突き立てた。驚く昭夫。それもそのはず一滴の血も流れなかったからだ。

「私が死神だと信じてもらえたでしょうか？」

昭夫は戦々恐々しながらコクコクと頷いた。

「それであなたの命と十億円の交換はどうしますか？」

「いや、命は困る。他のものにしてくれないか？」

「ではあなたの奥さんの命でもかまいませんよ」

考える昭夫。今では結婚当時より大きく太り醜く変わってしまった妻が頭をよぎった。昭夫は承諾した。死神は、

「三日後の夜十二時に命をもらいますね」

そう言うと霧散する死神。死神がいた場所には札幌の山ができていた。お札を拾い集める昭夫。

そして三日後の十二時の五分前。昭夫は布団で眠ったふりをして死神が言った時刻がくるのを待っていた。昭夫は内心本当に妻が死ぬのか半信半疑だった。すると妻が苦しみ、悲鳴をあげベツトから滑り落ちた。しかし昭夫も妻同様苦しみだした。昭夫は言った。

「……お前も……ハアハア……死神に十億円と俺の命を交換したのか……」

妻は苦しそうな表情で言った。

「……あなたも私の命と……うぐ……十億円を交換したのね……」

そして二人とも亡くなった。

「おしまい」

がんか

椅子に座った肥えたおじさんは真剣な顔で話した。

「眼科？」

それに椅子に腰掛けた医者らは声を荒げて言った。

「ここは眼科ではありません！」

太った男はまた

「眼科？」

と喋った。

医師は腹をたて立ち上がり言った。

「なんともいいますが、ここは眼科ではありません！ また、あなたに宣告しますがあなたは癌です」

太った男は言った。

「さっきから言ってるだろ。俺は癌か？ と。はっきり言われて覚悟が出来たよ」

医師は太った男の言葉を勘違いしていたのだ。癌かを眼科と。

「おしまい」

面接

.....

「あなたの長所はなんですか？」

「特にありません」

「でわ、あなたのセールスポイントはなんですか？」

「特にありません」

「それではあなたの特技はなんですか？」

「特にありません」

「あなたはうちにうかりたくないんですか？」

「はい、恐くてうかりたくありません」

面接官のエンマ大王は地獄に入る死人の面接試験を行っていた。しかし、死人は皆うかりたくない様子の者ばかりだった。

「おしまい」

クローン

今は西暦三千年。日本の衆議院議員立候補者のタツオは街頭演説をしていた。

「国民の皆様、私が衆議院議員に当選したら、まず第一にクローン牛やクローン豚の生産を禁止します」

タツオの周りにいる聴衆の一人が言った。

「よくそんなことが言えるな！」

タツオはムツとして言い返した。

「なぜですか？」

また同じ聴衆の一人が言った。

「お前もここにいる聴衆の半分の間人と同じ顔と同じ体格ではないか」

タツオと聴衆の半分も同じクローンだったのだ。

「おしまい」

お迎え

病院の個室のベットでおばあさんが横になっていた。名前はサチコという。その部屋の横開きの戸を開けて三人のおばあさんが入って来た。サチコは言った。

「カヤさんに、トモコさんに、ヤエさん、お久しぶり」

背がわりと高いカヤは

「本当に久しぶりね。十年くらい会ってなかったわよね」

と言った。

早口のトモコは喋った。

「また、あなたと話せて嬉しいわ」

サチコは大きな咳をしながら言った。

「私もよトモコさん……あなたたちが私の前に来たってことわ、私もいいよね……それは苦しいかしら？」

ヤエが質問に答えた。

「そんなことはないわ。意外と苦しくないわよ。さあ、一緒に逝きましょう」

カヤとトモコとヤエは足が無く幽霊でサチコを天国へ連れていくためにやってきていたのだ。サチコは心臓が止まり亡くなった。

{おしめい}

悩み

犬のぬいぐるみのプーさんには強い悩みがありました。それはそれは大きな悩みで海よりも深いものでした。その悩みはプーさんのご主人様の女の子のことでした。その少女はかわいい顔立ちの子供でした。プーさんは常々この手が動いたらあの忌ま忌ましいものを取ってあげられるのにと思っていました。

今、プーさんはベットに入って少女と一緒に寝ていました。「なんとか手を動かしたい。少女を救いたい。神様、一瞬でいいから動かせて」と考えていました。するとプーさんの右手が動くではありませんか。プーさんは少女を起こさないように右手を少女の顔の方に伸ばしました。そして女の子の右の鼻から一センチメートル程飛び出した鼻毛を掴み勢いよく引き抜きました。

「ぐわあぁー！ー！」

少女はそう言いましたがまた寝息をたて始めました。プーさんの悩みは少女の伸びた鼻毛だったのです。

{おしまい}

ジャンケンポン（前書き）

感想や評価等いただけると大変励みになります。宜しかったらお願いします。

ジャンケンポン

[illegible]

タイチは暇つぶしに相手とジャンケンポンをすることにした。

「最初はグー、ジャンケンポン」

グーが二つでアイコだ。

「最初はグー、ジャンケンポン」

チヨキが二つでまた、アイコだ。

「最初はグー、ジャンケンポン」

パーが二つでまたまたアイコだ。

それから五十回アイコが続いた。いい加減飽きたタイチはジャンケンポンを止め言った。

「鏡に映った自分とジャンケンポンしてもつまんないな」

おしまい

怖がり

今は春の日中。臆病なクマは恐怖にかられていました。とても恐ろしい相手に睨まれてクマは身動きができません。クマはブルブルと震えた声で言いました。

「お、お前なんか怖くないんだからな」

クマに直面している相手が一步クマに近づきました。するとクマは蒼白な顔になり一歩さがりました。

クマが怯える相手はバツタでした。バツタはクマを見ながら言いました。

「逃げないなら食べちゃうぞー」

クマはそれを聞くと一目散に藪の中に走って逃げました。

「おしまい」

ボケ

.....

ここは閑散とした公園。そこに二人の老人が立って話していた。

「サチコさん、わしと結婚してくれ」

「タイチおじいさん、私達は夫婦になってもう五十年じゃありませんか。ボケてしまったのですか？」

サチコはそう言つと足早に公園を出て行つた。残されたおじいさんは独り言を言つた。

「タイチとは誰の事だろう。わしの名はケイタだし、サチコさんボケてしまったのかの……。確かわしはケイタじゃよな……。」

{おしまい}

竹の子

その大きな竹の子は山の傾斜がかった竹林にありました。大きな竹の子が眠っていると竹の子狩りに老人がやってきました。老人はその大きな竹の子をチラッと見ましたが顔をしかめると別の竹の子を鎌で切り皮を剥いで袋につめました。それから老人は三、四個竹の子を採ると帰っていきました。それから日をおいて老人は竹の子を取りに来ましたが例の大きな竹の子はどうしても取りません。悩んだその大きな竹の子は竹の子狩りに来た老人に言いました。

「なぜ僕を取ってくれないんですか？」

すると老人は困惑した表情で言いました。

「竹の子の着ぐるみを着た人間なんか誰が取るんだ」
例の大きな竹の子は竹の子の着ぐるみを着た人間だったのです。

「おしまい」

飛べる？

男はビルの屋上で目を覚ました。

「あなた、ここは夢の中よ」

男が声の方を見ると妻が腕を組んで立っていた。妻は言った。

「あなたの頬をつねってごらんさい、痛みは無いはずよ」

男は言われた通り右頬をつねった。痛みは無い。妻は

「夢の世界では空を飛べるのよ。ビルの柵を跨いでジャンプしてみなさいよ」

男は一瞬迷ったが頬の痛みの無い事を考え柵を乗り越え飛んだ。

しかし飛んだのは一秒か二秒ぐらいで後は落下した。男はビルからダイブし死んだ。妻はニヤリと笑って言った。

「夫の頬に麻酔をかけていて正解だったわね。これで保険金がたんまり入るわ」

なんとここは現実の世界だったのだ。

「おしまい」

自殺

恋人が事故死した男は悲しみのどん底にあった。そして自殺を試みることにした。まず首吊り自殺を敢行した。しかし強靱な肉体を持つ男は平気だった。仕方なくロープをちぎり地面に降り立ち言った。

「切腹しよう……」

次の日、男は新品の包丁を右手に持ちリビングのソファに座った。そして腹の部分の服を左手でめくると包丁を勢いよく突きつけた。しかし包丁が粉々に粉碎された。

また、次の日男は練炭自殺を試したが平然としていた。

またまた、次の日ビルの十階から飛び降り自殺を行った。しかし飛び降りた後、普通に地面に着地してしまった。男はなぜ自分は死ねないんだろうと考えた。するとあることを思い出し喋った。

「忘れてた……俺スーパ。マンだったな……死ねない訳だ……」

「おしまい」

紐

大介は妻と海水浴に来ていた。砂浜や海は人でごったがえしていた。大介が海で泳いでいると直径二十センチメートルぐらいの紐を見つけた。大介は興味本意からその紐を砂浜に持ち帰った。紐の反対側はどこか海の底の方にあるようだ。大介は引っ張ってみた、しかしびくともしない。思案していると大介の周りに人が集まってきた。そして口々に「紐を引っ張るのを手伝います」と言い出した。紐を引っ張る人が数十人、数百人になると徐々に紐が海の中から姿を見せ始めた。そうすると「ズボツ」と大変大きな音がしたかとおもうと地震が発生し海に渦ができた。そして段々水位が無くなっていった。最後には海が無くなった。紐の反対側は海の栓だったようだ。

「おしまい」

気になる

葛西一家は夫婦と高校生の娘の三大家族だ。今は三人がテーブルに座り朝食をとっていた。しかし娘はあるものが気になってチラチラ見ていた。それは父の右頬から伸びた毛だった。その毛は太く、長さは三センチメートルはあった。娘はお父さんに

「動かないで」

と言うと頬の毛を掴み引つ張った。すると毛はちぎれるどころか伸びた。娘はそれを見て面白くなりまたグイッと引つ張った。頬の毛が三十センチメートルばかりになった。しかし、その反動か父のフサフサだった頭の毛は大変短くなった。父の髪が頭の中にすいこまれたのだ。父は頭の違和感を感じたのでしょう、頭を摩り言った。

「髪が減った！」

娘は「ここまできたらぼうずの方がましよ」と考え頬の毛をさらに引つ張った。

娘の父はそれ以来頭に毛が生えずぼうずのままです。

「おしまい」

菌

宇宙人アーリアは宇宙船に乗り地球の側にやって来た。目的はアーリアの星の不治の病を治す菌を採取しに来たのだ。その菌はアーリアが発見したばかりのものだった。地球にしか存在しない貴重な菌で量が少なく足りなくなったのだ。アーリアは五人の地球人をさらった。そのうちの一人から菌を手に入れることができた。そして地球人の記憶を消すと、もといいた場所にかえした。宇宙船の中でアーリアは呟いた。

「この菌を培養できれば我が星の患者達を救えるな。なんと素晴らしい菌なのだろう」

アーリアは手に持つフラスコに入った水虫の菌を愛おしげに眺めていた。

「おしまい」

分身の薬

ここは古ぼけたアパートの一室。一つしかない窓から春の温かい日差しがさしこんでいる。その部屋の住人タクオはフラスコに入った緑色の液体を右手に持ちながら言った。

「苦心の末『分身の薬』がついにできたぞ！ これで分身に働かせて俺は遊んでいられるぞ。早速使ってみよう」

タクオは左手で自分の頭髪を一本引き抜くとその髪に緑色の液体をかけた。するとモクモクと煙が辺りにたちこめた。煙がはれるとそこにはタクオとურიふたつの人物が立っていた。タクオは分身に言った。

「これから俺の代わりに会社に行ってこい」

タクオの分身はタクオを殴り付け

「お前が出社しろ」

と凄んだ。それからタクオと分身は喧嘩をした。

「頑張って働いてこいよ」

タクオの分身は負傷したタクオに笑顔で喋った。

「おしまい」

滅亡

勇者は世界を変えるため旅に出た。具体的な目的は地球を滅ぼし
かねない生物を根絶するためだ。そして勇者は全てを跳ね返す鎧兜
と一振りで巨大な都市を壊滅させる剣を手に入れた。そして十年の
歳月がながれた。勇者はついに一人を除いて地球に害をなす生き物
を滅亡させた。勇者は人間を殺していたのだ。勇者は決然とした表
情を浮かべると言った。

「人間はおれ以外はいなくなった。後はおれだけだな……」

勇者は鎧を脱ぐと剣を使って自決した。地球上に人間はいなくな
った。

「おしまい」

最強の戦士

[illegible]

今は春。小雨が降っていた。最強の戦士は二つのハサミをちらつかせながら恐喝をしていた。

「俺様はここいらで最強の戦士だ。その食べ物とを渡しな！俺様に殺されたくないからな」

小さい体格の相手はそう言われ泣く泣く食べ物を渡そうとした。そこへご主人様を連れたチワワがやって来た。最強の戦士はチワワにも二つのハサミをちらつかせたがチワワは平然としていた。チワワは最強の戦士の言った事を聞いていたようで、わざと前足で最強の戦士を踏み潰した。「グシャ」という音がした。最強の戦士は力二だったのだ。

おしまい

ボケとツツコミ

男は一人で森の大木の横で漫才の練習をしていた。その大木は樹齢数百年で意思を持ち枝を動かすことも喋ることもできた。男はボケ担当だった。男は相方とコンビを組んでまだ二日目で漫才を始めたのも最近だ。大木は男のボケを聞きツツコミたくてうずうずしていた。男は続けて言った。

「……僕の恋人は僕のことを愛情をこめて愛称で呼ぶんですよ……『豚野郎』って……。最近恋人と上手くいっていて喧嘩は一日に十回なんですよ……。僕の恋人は恥ずかしがり屋さんで僕が少しでも見つめると照れて言うんですよ……。『気持ち悪い、死ねって』……。この前僕と彼女でドライブに行っただですよ。そして車から海を見てたんですよ。その時僕が恋人に『君はなんて美しいんでしょう』って言ったら。彼女が『くさい』って言うんですよ。だから僕が『ごめんなさい、くさい台詞でしたね、ご主人様』って言ったら彼女に『お前の口臭が臭いんだよ』って言われたんですよ……」

男がここまで言ったら、我慢できなくなった大木が枝で男に突っ込んで言った。

「なんでやねん!」

男はその大木のツツコミの際に枝が胸に突き刺さり全治一ヶ月の重傷を負った。

「おしまい」

夢と現実

中年のタイチがその夢を見始めたのはいつ頃からだろう。夢の中では一流企業の重役を勤め、豪邸に住み、際だって美しい外見の奥さんがいる。幸せの極みだった。それに比べて現実とは真逆だった。タイチは毎晩早くベットに入った。夢の中の幸福を一分でも多く楽しみたかったのだ。そんなある日、夢の中で美しい妻に言われた。

「あなた、私あなたと離れたくないわ。夢の中でずっと一緒に居ましょう」

タイチは決心した。夢の中の住人になろうと。現実に戻ったタイチは出社の途中に走っている車の前に飛び出した。それ以来タイチは病院のベットで植物状態になった。これで夢の世界の住人になったのだ。タイチは幸福になっただろうと思われた。しかしタイチは頭を強打したためか見る夢も変わっていた。タイチは夢の中で裸族の長老になり不細工な二十人の妻のためにあくせく働いていた。タイチは現実の病院のベットの上でいつもうなされていた。

「おしまい」

テレパシー

公園のベンチに男女が座っていた。女はしかめた顔で言った。

「私、テレパシーができるの。今からあなたにテレパシーを送るわね」

男は意識を集中した。すると頭に言葉が浮かんた。

(……………『し』……………『ね』……………)

男はびっくりして女に言った。

「死ねって……………俺、君に何かしたかな？」

女は首を振って

「違うわ、もっと集中して！」

男は渾身の力で意識を集中した。するとまた言葉が浮かんた。

(……………わた『し』のあしをふんでるわよ……………はやくどけてよ『ね』……………)

男は急いで足をのけ女に謝罪した。

☆おしまい☆

重要な手術

.....

手術室でオペが行われていた。大変な大手術であった。ミスは命取りだ。医師はブルツと体を震わせ言った。

「看護師さん……」

女の看護師が反応した。

「はい、ふー、何でしょうか？」

医師は額に青筋を浮かべて言った。

「この手術にはこの病院の威信がかかっているのだよ」

女の看護師はしれつと「ふー、そうですね」と言った。

医師は女の看護師を睨んで

「いい加減私の耳にふーと息を吹き掛けるのはやめなさい！ 集中できないじゃないか！」

「おしまい」

いかにして

資産家のコウジは景色を眺めていた。なかなかの絶景である。勇壮な山々、透き通った美しい湖、見えるものは素敵なものばかりだ。すると戸をノックする音が聞こえた。コウジが戸を開けるとそこには友人のタツロウがいた。タツロウは慌てた様子で声をだした。

「聞いてくれ」

「タツロウ、君はどうやって……」

「まあ、コウジ俺の話を聞いてくれ。宝くじが当たったんだ！」

「宝くじが！ それは羨ましい。しかしタツロウ、君はいかにして……」

「コウジ、当たったのは一等だぜ！俺もこれで億万長者だぜ」

「そうか、よかったな。ところでタツロウ……」

「何？」

「ここは約上空二百メートルだよ。僕はヘリコプターに乗っているけど君はどうやってそこにいるんだい？」

「おしまい」

食べ物

浮浪者のタイチが人気のない砂浜で座って星空を眺めているところを宇宙人に捕まった。宇宙船の中で二人の宇宙人はタイチを歓待した。あらゆる豪華な料理、精巧に作られた機械の女、フカフカのベット、しかし風呂だけは入れられてもらえなかった。それらの歓迎を一月もつけるとタイチは痩せていたが太ってきた。しかし、風呂に入っていないので垢もつれだ。タイチが宇宙船の中を歩いていると宇宙人達の会話が聞こえてきた。

「人間のタイチはだいぶ太ってきたな」

「そうですね。もう少し、したらタイチを調理しましょう」

「そうだな、我々は人間の一部以外のものは食べれない体質なものな」

タイチは驚愕した。まさかこんな裏があるなんてと。それ以来食事が進まなくなった。それからいくじつかったある日、宇宙人達は服を脱がせたタイチをある部屋に入れた。そこは宇宙人達に調理室と呼ばれる部屋だった。タイチは覚悟を決めた。もう逃げられない、死のうと。タイチの体の周りに銃に似た機械がなん個か上から降りてきた。そしてその銃はタイチの全身に光線を発射した。タイチは自分は死んだ思ったが生きていた。そしてタイチの足元に大量の垢が落ちていた。宇宙人達はタイチの側にやって来るとタイチの垢を食べ始めた。宇宙人達は人間の垢しか食べられなかったのだ。タイチは安堵の溜息をついた。

{おしまい}

詐欺

.....

「私とデートしたいですって、なら私に百万円払いなさい」

男は百万円払って相手とデートをした。

「私と交際したいですって。なら私に一千万円払いなさい」

男は一千万円払って相手と交際を始めた。

「私とキスしたいですって。なら私に一億円払いなさい」

男は一億円払って相手とキスをした。

「私と結婚がしたいですって。……無理よ私まだ男だもの」

「詐欺だ」と男は思った。

「おしまい」

耐えれない

[illegible]

男は耐えていた。二十分堪えた。全身から冷や汗が滴る。我慢のしすぎか軽い眩暈を催した。男は狭い空間でふらつく。この場では駄目だ。人が密集している。しかし、もう耐えられない。すまない皆、これから起こる大惨事に耐えてくれ。

「プー!」

男の尻から出た悪臭が満員電車に立ち込めた。

おしまい

五杯まで四百円

[illegible]

「親子丼、五杯まで四百円か」

男は看板の文字を読むと店の暖簾に親子丼を注文した。しかし男は親子丼を五杯食べたが満足出来なかった。男は苦笑いしながら言った。

「一杯がオチヨコサイズなのは詐欺じゃないか？」

おしまい

最後の……

[illegible]

男は神棚に拝んでいた。男は心の中で（最後のだけは残しておいてください……僕の人生の希望なのです……失ってしまったたら立ち直れないかもしれません……後生ですからどうか……神様……最後の一本の頭髮だけは抜かないでください……）

おしまい

回転する

[illegible]

回転する世界。男は天を見た。空は雲一つなくとても青かった。男の足が浮き浮遊感を感じる。街を歩く人々が驚きの混じった視線を男に向けた。男は冷や汗をかき、心臓が動悸した。「あっ」と声をだす男。一瞬の出来事だった。男は両手で頭を庇う。男の後頭部が地面にぶつかる。男はバナナの皮で滑った。

おしまい

発射

・・・・・・・・・・・・・・・・

男は言った。

「玉をこめろ、目標確認、狙いを定めろ」

男は斜め上に顔を上げた。ターゲットに狙いをつける。一発目が発射された。勢いがあつたが女の横を掠めた。女は強気に喋った。

「相手は下手よ。今度はこっちの番よ。玉を入れて、目標を定めて、発射よ」

女の右鼻にピーナッツを詰め左鼻を指で潰して「ふんっ」と鼻息で発射した。男もピーナッツを発射した。これがこのカップルの秘密の遊戯だ。

「おしまい」

勝負

・・・・・・・・・・・・・・・・

二人の男が一人の女性をめぐって勝負をしていた。だだっ広い運動場の真ん中で行っていた。彼ら三人しかない。二人の男は一メートルぐらいの間を空け左足を前に出し向かい合っていた。二人は険しい表情で睨み合って動かない。女が心配そうに男達を見ていた。片方の男が言った。

「目がかわかないかい？」

言われた相手は痒みを意識してしまい瞼を閉じた。勝敗は決した。目をつむったら負けだったのだ。

「おしまい」

疑問

お姫様は王子様と恒久に幸せに過ごしました。しかし、お姫様には疑問がありました。王子様のキスで魔法使いの呪いがとけたのですがあの時のキスは普段のキスと違うと。あの時のキスはもっと大きな口が相手でよだれを垂らしていたはずだと。別人ではないかと思っております。そこでお姫様は王子様に詰問しました。

「あなたは私が呪いで眠っている時にキスしてくれたのよね？」

それを聞いた王子様は慌て始めました。目がキョロキョロして落ち着きありません。王子様は小さい声で白状しました。

「実は聞こえが悪いから黙っていたんだけど……君は僕のキスではなく僕の乗っていた白馬の接吻で目を覚ましたんだ……」

それを聞いて以来お姫様は王子様に対する態度が少し冷たくなりました。

「おしまい」

お伽話

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

「……シン。レラは王子様と幸せに暮らしました」

と女の子は本を読んでいました。女の子は笑顔になって心の底から言いました。

「シンデ。ラは幸せになれるのね。良かったわ」

女の子が椅子に座り机に向かっていると階下から意地悪な姉達の声がしました。

「シンデレ。！ 早く降りて来て掃除をしなさい！ 私達は今夜お城の舞踏会に行かなきゃならないのよ！ あなたはもちろん留守番よ！」

「おしまい」

幸せ

男は車の後部座席に座っていた。男はニヤニヤ顔で満足そうであった。それもそのはず、片思いだった可愛い女の子とキスしたのだから。気分は有頂天でどんなことがあっても気にならないだろう。男の隣に座っていた女が言った。

「そんなに、ニヤニヤして、あなたは自分が何をしたか分かってるの？」

男は幸せそうな笑顔で言った。

「ええ」

女は軽蔑した表情で喋った。

「あなたは嫌がる女性に無理矢理キスをして逮捕されたのよ。反省したらどうなの？」

男は自身の両手にかけられた手錠を一瞥してパトカーの窓から見える景色を眺めた。しかし彼の心は満たされていて幸せだった。

「おしまい」

天使

「僕が自宅近くにある公園でタバコを吸っていたんです。すると背中に純白の羽を生やした女の人が空から降りてきて言うんですよ。『あなたの願いを一つだけ叶えましょう』と。だから僕が『お金が欲しいです』と言うと、『千回ジャンプして、手を三百回叩きなさい。そうすれば願いが叶うでしょう』と言われたんです。女はその後また空へと帰っていきました。女の言う通りになると空から大量のお金が降ってきたんです。僕はだから大金を持っていたんです……いい加減信じてください裁判長……僕は銀行強盗はやっていない」

「おしまい」

新築

[illegible]

「やったぞ、家が新築になったぞ。ワイイ、ゴロゴロしよう。そしてジャンプだ、とお！ あ、痛！ 頭を打っちゃった。庭に男の人が入って来たぞ。ここは男らしく言つてやろう！」

庭に入って来た男は言った。

「ポチ、僕が手作りした新家はどうかい？」

ポチはご主人様だと分かり尻尾を振り「ワン」と鳴いた。

おしまい

人生の十字路

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

男は人生の十字路の真ん中に立っていた。右の道は自という看板があつた。多分自殺だろう。男は前の道を見た。看板にはホと書かれていた。ホームレスの略だろう。次に左の道に目をやった。看板には飢とあつた。飢え死にのことだろう。男は最後の希望を持って後ろの道を見た。看板にはニューと書かれていた。ニューライフの略だろうか？ 男はニューの道を進んだ。

男はニューハーフになった。

{おしまい}

探し物

・・・・・・・・・・・・・・・・

男は深夜の街を徘徊していた。真夜中であるため人っ子一人いない。男は辺りを見回しどこからか声らしきものを出し言った。

「……………ない……………ない……………あつた……………」

男は洋服店の窓ガラスを手につく大きな斧で叩き割った。そして男は男のマネキンの頭を引っかく抜いた。割れたガラスのかけらに映る男には首から上がなかった。男はマネキンの頭を自身の首の上に置いた。すると男の首とマネキンの頭がくっついた。男はマネキンの頭部なのにニヤッと笑った。

「おしまい」

誘拐

「あなたの息子タイチを預かった。返して欲しければ次のものを用意して……」

自宅のリビングで震える手で受話器を握るタイチの母親は言った。

「分かりました。だから息子を無事に返してください」

少し間があつて男の声が受話器から聞こえてきた。

「要求するものを言うよ。モン。ンの新作のゲームに板チョコレートを十個に三千円だよ」

お母さんは気付いて怒り受話器に言った。

「こら、タイチ！ あなたまた誘拐されたフリをしてるでしょ！ もう十回目よ！ 早く帰ってきなさい！」

タイチは不思議がりながら公衆電話の受話器に喋った。

「なんでいつもばれるの？」

「おしまい」

事故

[illegible]

夜遅く女はよそ見運転をしていて男の人をひいてしまった。女はとも動揺した。女は車を急いで止めると倒れている男に駆け寄った。しかし意識が無い。近くに警官がいたので話しかけた。しかし警官は何も言わない。まるで死んでいるようだ。女は警官を車でひいたことに動揺してすぐには気付かなかった。

おしまい

贗作

・・・・・・・・・・

「私の自慢はこの絵画達と妻です。え、この壁の絵達は本物かですつて。よく分かりましたね。全て贗作ですよ。私が趣味で書き上げたんです。寸分の狂いもなく描いたつもりです。え、あなたは自慢が妻なんてなんと愛妻家なんでしょうって、そうとも言えますね。まあ妻を見てくださいよ。えっ、妻がニコール・キッ。マンに瓜二つですつて。そうでしょう、私の贗作の最高傑作が彼女なんですよ。早い話が整形手術ですな」

「おしまい」

統一

[illegible]

部下は大統領に言った。

「大統領は凄いです。なんせ地球の国々を統一して一つにするなんて」

大統領は笑顔で喋った。

「難しそうだけど簡単だったよ。特に障害もなかったからね」

部下は大統領をもちあげる。

「大統領は天才です。偉大な方です」

と第三次核戦争を経て地球最後の生き残りとなった二人は話していた。

おしまい

溺れる

歳をとった老人が川で溺れていた。老人は始めバタついていたが徐々に動きが鈍くなり川のそこへ沈んでいった。老人は亡くなったろうと思われたが青年が川に飛び込み老人を助け岸の上に上げた。老人は水を吐き出しながら言った。

「危うく死ぬところだった。ありがとうよ、青年」

しかし青年は首を振り喋った。

「あなたはもう死んでいますよ」

老人は疑問に思い質問した。

「なぜじゃ？」

青年は言いにくそうに

「なぜならあなたは三途の川で溺れて、川の向こう岸にあるあの世に来てしまったからです」

「おしまい」

十年後

• • • • •

女は自室で鏡を見ていた。その鏡は最近発売されたもので鏡に映った者の十年後の姿を映すものだ。女は鏡を見て仰天して氣を失い倒れた。

鏡には白骨化した女の姿が写っていたのだ。

[illegible]

おしまい

半分だけ

ある休日、男が自宅のアパートで昼寝をしていたら揺り起こされた。男が横を見ると背中に羽を生やした女の子がいた。女の子は

「私はお昼寝の妖精見習いです。卒業試験に一人の願い事を叶えなければなりません。何か願い事はありませんか？」

男はそれを聞きとび起きた。そして少女をまじまじと見る。どこか神秘的な雰囲気醸し出している。本当に妖精のようだ。男は思案して言った。

「じゃあ、出世させて」

妖精は付け加えるように

「でも、私まだ見習いだから願い事は半分しか叶えられないんです」

男は「いいよ」と言った。

妖精はニツコリと微笑むと姿を消した。それから数日が経った。

男は会社では平社員のままだったが家庭で昇進した。家事手伝いから主夫に。

おしまい

願い事

「お前は永遠にわしの願いを叶え続ける」

「はい、私はあなたの願いを永遠に叶えます」

催眠術師は突然現れて「あなたの願い事を一つ叶えましょう」と言った小人のような妖精に催眠術をかけた。これで世界征服も可能だろうと思われた。催眠術師である老人は一つ目の願いを口にした。

「わしを五十歳若返らせてくれ」

妖精はパチンと指を鳴らした。

老人は若返り青年になった。催眠術師は喜び言った。

「これでもう一度人生を堪能できるぞ！」

妖精は

「……私はあなたの願いを永遠に叶えます……」

そう言うときまた指を鳴らした。すると催眠術師はだぼだぼな服を着た赤ん坊になった。妖精はまた喋った。

「……私はあなたの願いを永遠に叶えます……」

妖精はまたまた、指を鳴らした。催眠術師は受精卵になり最後は消えて無くなった。

おしまい

願い事（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますm（――）m

もう一つ『一人漫談』という自虐ネタ満載のコメディ―小説を連載しております。良かったらそちらも読んでいただけると嬉しいです。

遺書

大森康夫はテーブルの上に置かれた物に目がいった。一つは表に遺書と書かれた封筒でもう一つは開かれた遺書の中身の手紙であった。康夫は遺書の文面を黙読した。

『僕は人生に絶望し命を絶つ決意をしました。思い残すことは何もありません。親より先に死ぬ不幸をお許しください。僕は家族や親戚の皆のことが大好きです。皆さんが幸せになることを天国で祈っております。

大森康夫』

康夫の幽霊は思い出して言った。

「そうか、僕自殺したんだっとな。忘れてた」

「おしまい」

しりとり

男には前世の記憶がいくつもあった。男は四代前の人生で大島奈津子という会社の同僚に刺され死亡した。三代前の人生では古賀敏江という高校の時の同級生に毒を盛られ殺された。二代前の人生では江森静という近所さんの女性に首を絞められ殺された。前回の人生では片岡夏という上司に撲殺された。男は前世を振り返っていることに気付いた。

「おおしまなつ」……「こがとしえ」……「えもりしずか」……「かたおかなつ」……全部がしりとりになっている

男は高い崖から突き落とされて落下していた。その時にあることに気付いてホッとして言った。

「今回僕を殺したのは妻のつがかりんだ。最後にんがついている。これで来世は殺されなくてすむぞ。良かった」

「おしまい」

思い

あるところに高邁な精神を持った青年実業家がいた。彼は公然の場で平和について訴えていた。青年は世界平和の一助として多額の寄付をし尊敬の念を集めていた。そんな彼の前に妖精が現れて言った。

「あなたのいつも願っている事を叶えましょう」

そして妖精は姿を消した。それから数日が過ぎた。しかし世界は紛争等が絶えず平和にはならなかった。そのかわり世界中の衣類が消えて無くなった。青年実業家は世界平和よりもスケベ心の方が強かったようだ。

「おしまい」

不思議なやまびこ

山田大介は仲間と山登りをした。頂上につくと美しい景色を堪能した。その後お弁当を食べた。とても美味しかった。その次にやまびこを聞こうと大介は立ち上がり崖っぷちから隣の山に向かって言った。

「沢田千賀子さん！ 死ぬ程好きだー！ 僕と付き合ってくださいー！
ーい！」

するとやまびこ？ がかえってきた。

「山田大介さん！ 私、千賀子もあなたのことが大好きでーす！
喜んでお付き合いしまーす！」

沢田千賀子も仲間と隣の山を登っていたのだ。

「おしまい」

ミーンミン

.....

美しい顔立ちの女がアパートの一階にある一室で着替えをしていた。すると外から鳴き声が

「ミーンミン、ミーンミンミン」

美人の女は急いでズボンを履き上着を着るとベランダにつながる窓を開け言った。

「この変態男！ また、蝉のふりをして私の着替えを覗いてたのね！ もう警察に言っわよ！」

男は言った。

「ミーンミン……すいませんでした。警察だけは勘弁してください」

「おしまい」

感想

〈感想〉

『この小説達は稀に見る駄作である。こんな作品を書く作者の気が知れない。ただの文章の羅列で起伏がなく読者に訴えてくるものが皆無である。こんな小説を公開することは禁止されてもおかしくない。作品同様作者も存在価値のない駄目人間に違いない。作者はなるべく早く筆を折るべきである。これ以上つまらない凡作を世に生み出すのはある意味犯罪である。罪を犯した者は刑務所に入らなければならぬ。つまりこの小説達を作った作者もしかりである。言いたいことは以上である。』

あなたの愛用のパソコンより『

徹夜して小説を書いた日の朝パソコンを見るとWordに上のように書かれていた。

おしまい

ひっそりと

ある日の夕方。人間には姿の見えない宇宙人は街中をさ迷っていた。そして宇宙人は知っていた。人間にとりつかなくては自分は死んでしまうことを。しかし一度とりつくとその人間が死ぬまで離れられなくなる。宇宙人はひっそりと暮らすためにどこにでもいるような犬の散歩をしていたおじさんにとりついた。そして翌日、宇宙人は買い物に出かけた。しかし元宇宙人は自分が大きなミスをしていたことに気づかされた。ひっそりと暮らすことは困難である。街で出会った人々は元宇宙人をみると決まって顎の下に右手を水平に浮かして言うのである。

「アイー。」と。そして元宇宙人も渋々返すのである。「アイー。」と。

「おしまい」

辞書

・・・・・・・・・・

(1)

「僕の辞書は元はナポレ。ンのものなんだぜ」

「え、すごい！ どうして？」

(2)

「不可能という語彙を切り取ったからさ」

「俺胸が苦しくて病氣みたいなんだ。君の辞書に治療方は載ってないかい？」

「どつという病氣なの？」

「君に対して恋患いさ」

(3)

「この分厚い辞書に載ってないことなんだけど教えてくれないかな？」

「いいわよ、私にわかることならね。それで何が知りたいの？」

「素敵な君の口説きかたをね」

「おしまい」

真剣な決闘

・・・・・・・・・・・・・・・・

ここはただ広い駐車場。一人の美女をめぐって二人の男が決闘をしていた。男達は一メートルぐらい離れて闘っていた。近くに女の姿もあった。男達は真剣な顔で向かいあっていた。片方の男が右手の人差し指のみを伸ばし機敏に動かした。すると相手の男は俊敏に顔を動かした。今度は逆の男が右手の人差し指のみを伸ばし素早く人差し指を動かす。それを見て相手の男は顔を右に向けた。決闘している二人は口づさんでいた。

「「あっち向いてほい！」」

{おしまい}

勇者とお姫様

世界を旅していた勇者アベルはこっそりお城を抜け出していたお姫様イーナと宿屋で出会った。二人は一目あった瞬間から恋に落ちた。二人は駆け落ちをしてその国から逃げ出した。そして一年後、魔王を倒し世界に平和をもたらしたアベルとイーナは小さい国の元首になった。イーナはベットに横たわっていた。そしてイーナはこぶりなベルを鳴らした。するとドタドタと足音が聞こえた。そして部屋のドアを開けアベルがやってきた。イーナは目をつむったまま言った。

「足」

アベルはイーナの側にやってくるとイーナの足をマッサージし始めた。イーナは心地良さそうにしながら

「ワイン」

アベルはテーブルにあったワインをコップにつぎイーナに渡した。イーナは一息にワインを飲み言った。

「ワインおかわり」

アベルはイーナの持つコップにワインを注いだ。イーナは歳であり動けなかった。イーナは今年九十歳になった。アベルは今年十歳になったばかりだ。イーナはしんどそうに言った。

「あなた、私が魔王を倒した事をばらされなくなかったら献身的にはたらくのよ」

アベルは元気よく

「はい、ご主人様」

と言った。

「おしまい」

ハッピーエンド

貧乏な女の子ルーは王子様と結婚し幸せに過ごしましたとき。

「おしまい」

ホームレスの女ルーは大金を拾い楽しんで人生を過ごしましたとき。

「おしまい」

野良犬のルーは優しい女の子に拾われハッピーに暮らしましたとき。

「おしまい」

虐められっ子のルーはがき大将をやっつけ、その後勝ち組の人生をおくりましたとき。

「おしまい」

女王のルーは敵対国を倒し世界統一を果たしたとさ。

「おしまい」

お姫様のルーは……

（私の番だわ！ 私の名前もルーだしハッピーエンドは確実ね！
良かったわ、どうハッピーエンドになるのかしら）

……。

「おしまい」

（ええ！ ちょっと終わっちゃったじゃないの！ 私もハッピー
エンドに……）

「おしまい」

[illegible]

男は玉ねぎをきざんでいた。

330

困難

『虎』 「僕は大変なものに挟まれてしまった。前門の虎に後門の龍とは。どう生き延びようか」 『龍』

『虎』 「そうだ声を大にして助けを呼ぼう。誰か助けてくれー！」
『龍』

『勇者？』 『虎』 「勇者が来てくれたぞ。これで助かった」 『龍』
『勇者？』 「勇者が虎を退治してくれたぞ。ワイ。ありがとうございます」 『龍』

『山賊』 「しまった。勇者と思っていたら山賊だったとわ。グワッ！
山賊に刺された……」 『龍』

『山賊』 「……」 『龍』

〜おしまい〜

許さない

.....

男はリビングで椅子に腰掛け女と喋っていた。

「いい加減許してくれないか？」

女は顔を横に振りながら

「絶対許せないわ」

「これからも俺に付きまとうというのか？」

女は男を睨みながら言った。

「そうよ。あなたに不倫されて私はそれを苦にして自殺して死んだけどあなたが生きている間は側を離れないわ！」

女は全身が透けていた。幽霊だったのだ。

「おしまい」

留守番電話

留守番電話メッセージ1

『もしもし良江よ。結婚してくれないなら死んじゃうからね!』

留守番電話メッセージ2

『もう、木にロープを吊したわ。早くプロポーズしないとどうなっても知らないわよ!』

留守番電話メッセージ3

『今、台に登ったわ。後は首を吊るだけよ。早く愛の台詞を囁きなさい!』

留守番電話メッセージ4

『く、苦しい……今……首を吊ってるわ。最後のチャンスよ。告白しなさい!』

留守番電話メッセージ5

『恨めしや! 死んじやったわ。愛の告白をしないと、とりつくわよ!』

一人暮らしの会社員美紀子は何度もかかってくる愛の告白の催促の電話に恐怖していた。死んでしまった良江は間違った番号に電話していたのだった。

「おしまい」

怪物

ハカセは怪物を生み出す張本人だ。ハカセは所属している組織にこれ以上怪物達を作り出したいくないと直訴した。しかし認められなかった。仕方なく自室で怪物を生み出す作業をしていた。隣には組織の女が立ってハカセを見張っていた。女は言った。

「ハカセ、しっかり作ってくださいよ」

ハカセは渋々うなづいた。それから数時間経った後ハカセは喚いた。

「俺はこれ以上殺戮を繰り返す怪物は作りたくない！」

すると傍らの女は言った。

「羽下瀬^{ハカセ}、あなたの仕事は怪物スリラーものを書く小説家なんですよ。怪物を書かないでどうするんですか？」

羽下瀬は書きかけの原稿用紙をビリビリと破いた。

「おしまい」

着信音

トゥルルル♪、トゥルルル♪

着信音が鳴り響く。俺はベッドで就寝中なのだ。絶対に電話に等出ないぞ。

トゥルルル♪、トゥルルル♪

あー電話の喧騒が鬱陶しい。なんて耳障りなんだ。さっさと鳴り終われ！

トゥルルル♪、トゥルルル♪

ああ、もう分かったよ出れば良いんだろ。俺は自分の携帯電話を枕の横から引き寄せた。しかし携帯電話は鳴っていないかった。

トゥルルル♪、トゥルルル♪

俺は横で寝てる妻を伺った。すると妻は口ずさんだ。

「トゥルルル♪、トゥルルル♪」

着信音は妻の寝言だったのだ。まぎらわしいわ！

「おしまい」

着信音（後書き）

久しぶりに不思議なお話を更新しました。何ヶ月ぶりかな（遠い目）。

後書きまで読んでくださりありがとうございますm（――）m。

事件

探偵気取りなオイラは容疑者三人に詰め寄った。

「お前達の一人が今回の事件の犯人だな？」

ここは高校の文芸部の部室。窓は全て開かれている。そこには四人の人間が居た。オイラは辛さのため涙を眦に貯め詰問する。

「さあ！ 自首するんだ！」

「容疑者1」(私がやったてバレルわけないわ……)

「容疑者2」(焦るな…… 平静を装おうんだ。僕がしたなんて誰も気付かないさ)

「容疑者3」(まさか俺がしちまうなんて…… 我慢出来なかったんだ……)

「さあ白状するんだ！ 誰が泣け、むせる程臭い放屁をしたのかを！」

「容疑者1」(犯人は私よ)

「容疑者2」(犯人は僕だ)

「容疑者3」(犯人は俺だ)

「探偵きどりな人」(犯人はオイラだ)

全員同時にオナラをこいていたのだった。

「おしまい」

事件（後書き）

あけましておめでとぅございます m () m

またまた更新しました。

本年もよろしく願います！

m
後書きまで目を通してくださり、ありがとうございます m () ()

ええー

俺は大中達也、職業は俳優、年齢は三十五歳、性別は男、獅子座で血液型はO型、趣味はネットサーフィン、妻の名前は香織、愛犬の名はグロッキー。

そんな俺は居間で椅子に座りテーブルに並べられた朝食を食べながらテレビを見ていた。次は占いを放送するようだ。テレビは占いの内容を発表した。

「今日、最悪にアンラッキーな人は……大中達也さんで、職業は俳優、年齢は三十五歳、性別は男、獅子座で血液型はO型、趣味はネットサーフィン、奥さんの名前は香織さん、愛犬の名はグロッキーなあなたです。間違いなく今日中に事件に巻き込まれるでしょう……」

ええー？ 寸分も変わらず俺の事だよね！？ どんだけ細かいんだ！？ 俺のことすぎて悪寒がしたんですけど。

ピンポンとインターホンの音。

ビク！

ピンポンとまたもインターホンの音。

ビクビク……！

「繰り返します！ 今日、最悪にアンラッキーな人は……大中達也さんで、職業は俳優、年齢は三十五歳、性別は男、獅子座で血液型はO型、趣味はネットサーフィン、奥さんの名前は香織さん、愛犬

の名はグロッキーなあなたです。間違いなく今日中に事件に巻き込まれるでしょう。絶対に外出しないでください……」

明らかに俺のことだよね……。どんなピンポイントな占いなんだよ！

ピンポンとまたまたインターホンの音。

ビクビクビク……！！

玄関の外にはプラカードを掲げた男やカメラマンが待機していた。プラカードには『どつきり大成功』と綴られている。テレビ放送の占いはどつきりのための放送だったのだ。仕掛ける側の奥さんがビデオをテレビに映していたのだ。

（おしまい）

預金残高

俺が仕事を始めて五年目。

「預金残高トータルで」一千万円。

俺が仕事を始めて十年目。

「預金残高トータルで」五千万円。

俺が仕事を始めて二十年目。

「預金残高トータルで」二億円。

俺が仕事を始めて三十年目。

「預金残高トータルで」十億円。

俺が仕事を始めて四十年目。

「預金残高トータルで」無し。

ええー！！ 預金が無くなった！ コツコツ貯めてきたのに！！
俺の唯一の楽しみを奪ったのは誰だ！？ これは犯罪行為で訴えるぞ。俺は息を巻いて警察署に乗り込み訴えた。

「犯罪にあいました！ 俺の預金が奪われたんです！」

するとがたいの良い二人の警官出て来て俺を取り押さえ、なんと

手錠をはめた。

「何をするんだ！ 俺は犯罪被害者だぞ！」

一人の警官は言葉を発した。

「相田康夫だな！ お前の銀行口座は差し押さえた！ お前をオレオレ詐欺の容疑で逮捕する！」

あ、俺犯罪者だったけ……預金残高の事で頭がいっぱいで忘れてた！！ ミスッたーーーー！！

「おしまい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4005i/>

不思議なお話（短編集）

2012年1月11日10時53分発行